

平成25年度

研究のまとめ

～実践集録～



平成26年3月
鹿児島県立大島養護学校

目 次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 1
2	平成25年度テーマ研究について・・・・・・・・	P 2
3	平成25年度テーマ研究の取り組みについて・・	P 5
4	提供授業のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	P 21
5	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 50
6	研究同人・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 51
	資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 52

資料① 集中実践期間使用書式①～③

資料② ワークショップ型授業研究の流れ

資料③ ワークショップ型授業研究についての意見集約

資料④ アンケート集計結果（抜粋）

はじめに

ここ奄美大島では3月立春を過ぎるころから、まさに春の訪れを肌で感じる季節となり、すでに色鮮やかな緋寒桜も新緑の葉桜に衣替えしています。

さて、近年の学校教育の現状は、様々な課題が山積しており、教職員の業務の多様化が叫ばれています。そのため、教師自身が求める授業力向上に向けた専門性を高めるための協働力を発揮する機会が設定できない状況にあります。また、教職員の資質向上に関する中央教育審議会答申や、「教職全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」と題する中央教育審議会特別部会報告等において、教職員が協働して体験的に学び合える研修の充実を図る必要性が指摘されています。

このような中、本校では平成22・23年度に「生活に生かす力をつける授業づくり～授業力向上を目指して～」の研究テーマの下、各学部において「授業づくり」の実践研究を進めてきました。その成果をさらに深化することを目指して、平成24年度から「授業設計→授業提供→授業反省→授業改善」のPDCAサイクルシステムの確立を目指し、教師集団として、みんなで語り合う授業づくりと授業研究に取り組むこととしました。

幸い、県総合教育センターにおける「授業研究サポート事業」の協力校としての機会を得ることができ、「みんなで語り合う」というキーワードを共有し、ワークショップ型の授業検討会の試行を重ねてきました。

また、平成25年度は「児童生徒の生きる力を育む授業づくり～みんなで語り合うPDCAサイクルを通して～」を研究テーマに掲げ、課題を共有する教師チームを編成し、「授業者まかせにすることなく、チームでの学習指導案づくり」や「授業研究会での焦点化した話し合い」、「全員が意見を出し合える活発な授業研究会」、「日常の学習指導に生かされる授業研究」などを目指して研究実践に取り組んできました。

以上のような取組については各学校においてもすでに研究されているのではないかと考えられますが、この2年間において、77本の授業提供を行い、相互研修に取り組んできた本校教職員の熱意が、今回の実践収録としてまとめられています。まだまだ十分な成果を提供するまでには至っていませんが、皆様からの御批正をいただき、私たちの取組がさらに前進できるように努めていきたいと考えております。是非、忌憚のない御意見や御指導をよろしくお願いいたします。

結びに、本研究を進めるに当たり、懇切丁寧な御指導・御助言をいただきました県総合教育センター特別支援教育研修課 奥 政治係長に感謝の意を表します。

平成26年3月

校長 中村良一

平成25年度 テーマ研究について

1 平成25年度 研究テーマ

「児童生徒の生きる力を育む授業づくり～みんなで語り合うP D C Aサイクルを通して～」

2 テーマ設定の理由

児童生徒一人一人に「生きる力」を確実に身に付けさせたい。そのために私たちの指導上の課題、実践上の課題解決を図り、指導力・授業力の向上を目指していくことが大切であると考えている。

そこで、平成23年度は、学部を解いた縦割りのグループでテーマ別研究に取り組んだ。似た実践課題を抱える教師同士での学部を解いたグループ編成を行い、授業提供と授業研究、日々の実践の積み上げを通して課題解決に取り組んできた。小集団で似た実践課題を持つグループ編成をしたことと一人一人が対象事例を設定して研究に取り組んだことで、個々人の自我関与の高い研究に取り組むことができた。

平成24年度には、「みんなで語り合う授業づくりと授業研究～思いを授業改善につなげよう～」を研究テーマに設定し、授業づくりにおいてそれぞれが課題を感じている教科・領域についてのアンケートを行った。その結果を基に学部単位で小集団の「チーム」を作り、3カ月の集中実践期間を設けて「授業設計→実践（授業提供）→授業研究→授業改善」のP D C Aサイクルの実践に取り組んだ。「授業について気楽に語り合うことができた」「授業を作る視点や授業改善の視点を得られた」「授業について多くのアドバイスがもたらされた」等多くの成果を得られたものの「授業設計（P）の部分が不十分に感じられた」「提供授業数が多く改善の実感に乏しかった」「使用した略案の形式や授業づくりの視点の活用が不十分であった」「授業参観の方法や授業検討会に関する共通理解が十分でなかった」「児童生徒の変容を詳細に追えなかったため、成果の実感に乏しかった」といった課題等も挙げた。

今年度（平成25年度）は、昨年度の成果を踏まえつつ更に児童生徒一人一人への適切な指導の充実や授業力の向上を目指し、児童生徒の「生きる力」を育む授業づくりができるよう取り組みたい。そこで、平成23年度から積み上げてきた実践（小集団での課題解決・語り合いによる授業づくり）の蓄積を生かし、授業づくりのP D C Aサイクルをより一層充実させる研究に取り組んでいこうと考えた。また、昨年度の課題として挙げたことについては、方法を修正しより実践に即した取り組みやすい環境を整えた上で、児童生徒の「生きる力」を育むことを意識した授業づくりに取り組んでいければと考える。職員同士の語り合いを通して、日々の授業を充実させることで本校教育目標の達成と本校教師集団の授業設計力の向上が実現できるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

※ 本研究の中での「生きる力」とは、個別の教育支援計画・個別の指導計画、あゆみ、チェックリスト等の児童生徒の教育的ニーズから導き出される種々の力であると位置づける。この「生きる力」を育むためには、日々の授業の中で妥当性の高い目標の設定と指導内容の精選が行われ、その目標の達成に向けた指導を継続していく必要がある。目標の設定は担任だけでなく、各教科・領域の指導者等複数の教師の視点を生かした定例のケース会や小集団による授業づくりの過程において検討されることが非常に重要である。

3 研究テーマについて

本研究テーマ「児童生徒の生きる力を育む授業づくり～みんなで語り合うP D C Aサイクルを通して～」には、大島養護学校の教師一人一人が「授業づくり」に参加し、児童生徒の「生きる力」を育む授業を追究しようとする姿勢を持ち続けようという思いが込められている。この研究が、経験年数の異なる教師集団であっても、経験知を伝え合い、互いの教育に対する思いを尊重し合い、語り合いを深められる学校の雰囲気醸成につながることを願う。

4 研究の目的

個別の教育支援計画及び個別の指導計画等から導き出された児童生徒の教育的ニーズに基づく「生きる力」と「日々の授業」との関連を意識した教師間の語り合いによる授業づくりの在り方を明らかにするとともに、本校における実践可能な「授業設計→実践→授業研究→授業改善」の授業づくりにおけるP D C Aサイクルの確立に取り組む。

5 研究の仮説

小集団の「チーム」で授業設計や授業研究、授業改善に取り組むことで、教師集団としての授業設計力を高めることができ、児童生徒の変容や成長につながるのではないかと。また、授業づくりにおけるP D C Aサイクルに実践を通して組織的に取り組むことで、本校における継続可能な授業づくりの在り方が確立できるのではないかと。

6 研究内容

- ・ 個別の教育支援計画や個別の指導計画等を基にした小集団での語り合いによる授業づくりの進め方を研究する。
- ・ 児童生徒の授業における変容や成長を確認することで、授業改善の成果を検証する。
- ・ 授業づくりのP D C Aサイクルの過程で話し合い、学び合い、深め合ったことを実践する。
- ・ 集中実践期間において授業提供と授業参観、授業研究（ワークショップ型の授業検討会）の方法の確立を図り、本校において継続可能な授業づくりの体制（環境）を確立する。
- ・ 各チームでの実践の校内での共有化を図る。

7 研究方法

- ・ 教師の課題意識を基にした研究に取り組むための小集団の「チーム」編成を行う。
- ・ 集中実践期間を設け、経験年次別研修の研究授業や各チームからの提供授業について「授業設計→実践→授業研究→授業改善」のP D C Aサイクルに取り組む。
- ・ 授業提供計画の作成と指導略案の全職員による共有。
- ・ 教育支援計画、個別の指導計画（今年度の重点目標）、あゆみ、チェックリスト等を基にした児童生徒の教育的ニーズの整理。
- ・ 授業参観の仕方や授業研究の方法については、鹿児島県総合教育センターや鹿児島大学附属特別支援学校等の先行研究を参考にし、本校の実情に合わせながら実践を行う。
- ・ 研究のまとめの一環として「授業力向上プログラム」における授業公開を実施し、広く本校の授業及び研究を公開する。

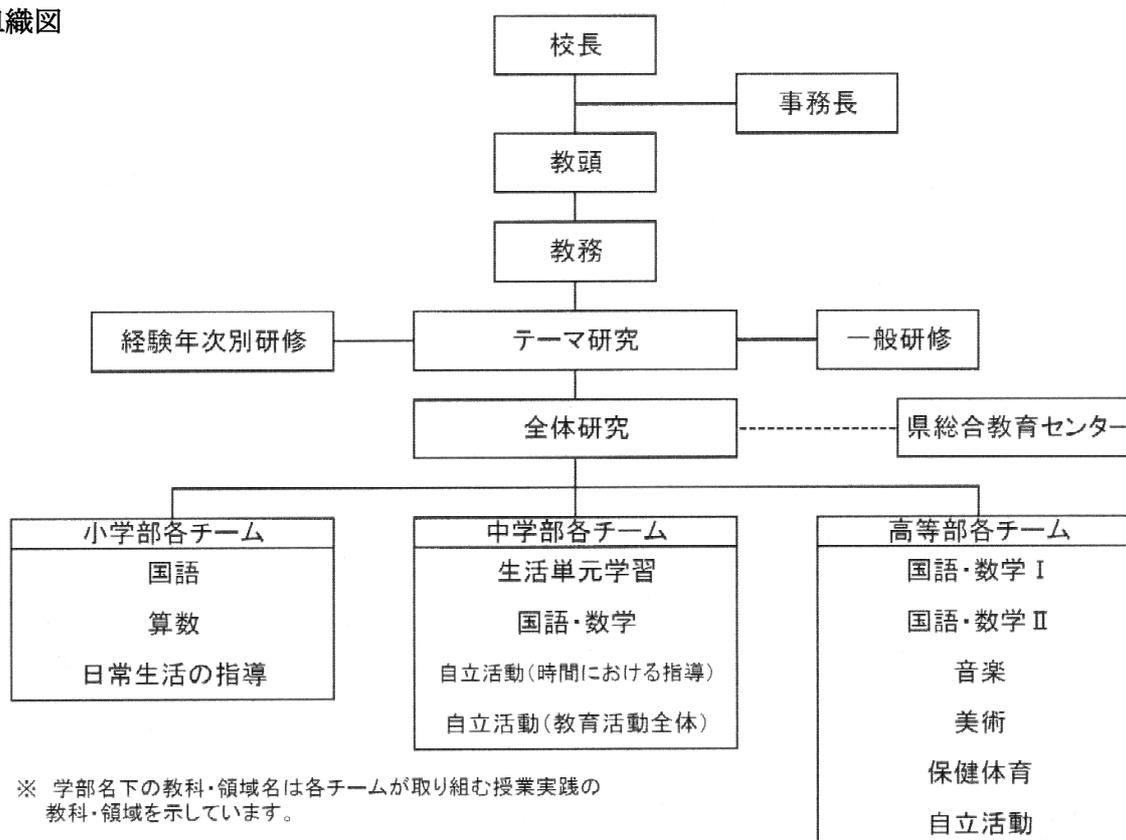
8 仮説の検証方法

児童生徒の変容を授業検討会等で検証し、小集団のチームごとで授業改善の成果を確認する。また、集中実践期間、授業公開の終了後に、本研究の成果と課題等についてアンケートを実施し、分析する。

9 研究計画と研究組織

1年次 (平成23年度)	<p>※ 「個別の指導計画」より、担当する児童生徒の重点目標を探る。1職員1児童生徒を担当し、取り組みたい指導方法についてアンケートをとる。アンケート結果からグループ編成を行い、小集団での研究を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料を読み合い、より具体的な指導方法を学ぶ。 ・ 学び合った内容を実践し、班ごとに研究授業を行って深め合う。 ・ 実践例・成果・課題等を一人ずつまとめて、実践報告集を作成する。 						
2年次 (平成24年度)	<p>※ 小集団編成を行い、チームごとに研究を進める。平成23年度の実践の視点を生かしながら「授業設計→実践→授業研究→授業改善」の一連の過程や方法について実践を通して研究を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 総合教育センターが実施する「授業研究サポート事業」を活用し、先行研究を参考に研究に取り組む。 						
3年次 (平成25年度)	<table border="1"> <tr> <td>一学期</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究及び授業公開に関する共通理解 ・ チーム編成と集中実践期間の進め方に関する確認 ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（6月・7月） </td> </tr> <tr> <td>二学期</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（9月・10月） ・ 授業公開（11月8日） ・ チームでの実践のまとめ ・ 研究についてのアンケートの実施 </td> </tr> <tr> <td>三学期</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ 成果と課題の確認 ・ 今年度の研究のまとめ ・ 実践集録の作成 </td> </tr> </table>	一学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究及び授業公開に関する共通理解 ・ チーム編成と集中実践期間の進め方に関する確認 ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（6月・7月） 	二学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（9月・10月） ・ 授業公開（11月8日） ・ チームでの実践のまとめ ・ 研究についてのアンケートの実施 	三学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成果と課題の確認 ・ 今年度の研究のまとめ ・ 実践集録の作成
一学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究及び授業公開に関する共通理解 ・ チーム編成と集中実践期間の進め方に関する確認 ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（6月・7月） 						
二学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集中実践期間における授業提供Ⅰ（9月・10月） ・ 授業公開（11月8日） ・ チームでの実践のまとめ ・ 研究についてのアンケートの実施 						
三学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成果と課題の確認 ・ 今年度の研究のまとめ ・ 実践集録の作成 						

組織図



平成25年度テーマ研究の取組について

本校では、平成24年度から「小集団での授業づくりのP D C Aサイクル（授業設計→授業提供→授業反省→授業改善）」を2年間の研究テーマとして授業実践に取り組んできた。平成25年度は「児童生徒の生きる力を育む授業づくり～みんなで語り合うP D C Aサイクルを通して～」を研究テーマに掲げ、授業づくりや授業改善の在り方、個別の教育支援計画や個別の指導計画と日々の授業の関連付けといったことを重点に取組を深化・発展させながら実践を行ってきた。また、授業改善へつなげるための授業研究の方法として「ワークショップ型の授業研究」にも取り組み、実践を通して整理を進めてきた。

1 平成24年度のテーマ研究の成果と課題

平成24年度は、「みんなで語り合う授業づくりと授業研究～思いを授業改善につなげよう～」を研究テーマに設定した。小集団編成にあたっては、授業づくりにおいてそれぞれが課題を感じている教科・領域についてのアンケートを行い、その結果を基に学部単位で小集団を編成した。（本校の研究では、「仲間として連帯し、語り合いやチームワークを大切にしたい」という思いを込めて実践に取り組む小集団を「チーム」と呼んで実践を進めた。）

共通の指導略案の書式や授業を参観した職員が記入するカード等のツールを整理し、3ヶ月間（9月～11月）の集中実践期間を設けて「授業設計→実践（授業提供・相互授業参観）→授業研究→授業改善」のP D C Aサイクルの実践に取り組んだ。授業改善につながる具体的な意見やアイデアが職員の語り合いの中から出やすいように、ワークショップ型の授業研究の方法も導入して集中実践期間の取組を進めていった。各チームから多くの授業が提供され、計38本（V T R提供も含む）の授業が提供された。

実践にあたっては、県総合教育センターや県立鹿児島養護学校等の先行研究を参考に組み合わせ、県総合教育センターの「授業研究サポート事業」を活用して特別支援教育研修課と連携をとり、指導・助言を頂きながら進めた。

平成24年度の取組を終えて、「授業について気楽に語り合うことができた」「授業を作る視点や授業改善の視点を得られた」「授業について多くのアドバイスがもられた」等多くの成果を得られたものの「授業設計（P）の部分が不十分に感じられた」「提供授業数が多く改善の実感に乏しかった」「使用した共通の略案の形式や授業づくりの視点の活用が不十分であった」「授業参観の方法や授業検討会に関する共通理解が十分でなかった」「児童生徒の変容を詳細に追えなかったため、成果の実感に乏しかった」といった課題等も挙げた。

平成24年度は小集団編成で職員同士の語り合いを中心に据えてテーマ研究に取り組んだことで、「全員が参加して取り組むテーマ研究」とすることができ、職員一人一人の研究への自我関与を高めることにつながった。



チームでの
授業づくりの話し合い



集中実践期間における
授業提供と相互参観



授業提供後の
チームでの授業研究



ワークショップ型
授業研究に関する研修

3 平成25年度の研究の経過について

平成25年度は、前年度から積み上げてきた実践（小集団の語り合いによる授業づくり・授業提供と相互参観・授業改善へ向けた取組等）の蓄積を生かし、授業づくりのPDCAサイクルをより一層充実させる研究に取り組んでいこうと考えた。これまでに課題として挙げたことについては、方法を修正し、より児童生徒の「生きる力」を育むことを意識して授業づくりに取り組んでいけるようにした。また、前年度に作成した書式やツールも修正し、授業実践に取り組めるような計画とした。

平成25年度のテーマ研究は、以下のように取組を進めてきた。（表1）また、当該年度は、「授業力向上プログラム」における授業公開を実施する年度にあたる。そこで、本校の研究の取組と授業実践を紹介するためにテーマ研究の一環として「授業力向上プログラム」における授業公開の実施にも取り組んだ。

＜表1：平成25年度テーマ研究の経過＞

月	取組内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> 平成25年度のテーマ研究について（概要説明と方向性の確認） テーマ研究で授業改善に取り組みたい授業の希望調査の実施
5月	<ul style="list-style-type: none"> チーム編成の確定 集中実践期間についての全体での共通理解（略案形式や参観者が付箋紙を貼るマトリクスシート等） 授業提供計画の作成
6月	<ul style="list-style-type: none"> 集中実践期間（授業設計・授業提供と相互参観・授業研究・授業改善） 11月8日実施「授業力向上プログラム」における授業公開についての提案
7月	<ul style="list-style-type: none"> 集中実践期間（授業設計・授業提供と相互参観・授業研究・授業改善）
夏季休業中	<ul style="list-style-type: none"> 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課作成「知的障害特別支援学校における各教科の具体的な内容の例」の紹介と配付 集中実践期間についての全体での再確認（略案記入の方法・参観体制・付箋紙の記入の仕方） 授業公開におけるワークショップ型の授業研究の具体的な流れとマニュアルについての確認
9月	<ul style="list-style-type: none"> 集中実践期間（授業設計・授業提供と相互参観・授業研究・授業改善）
10月	<ul style="list-style-type: none"> 集中実践期間（授業設計・授業提供と相互参観・授業研究・授業改善） 授業公開の準備作業（資料作成、公開授業の準備等）
11月	<ul style="list-style-type: none"> 「授業力向上プログラム」における授業公開の開催 授業公開の成果と課題の整理 ワークショップ型の授業研究のメリット・デメリットについてのチームごとでの検討
12月	<ul style="list-style-type: none"> ワークショップ型の授業研究についての意見集約に関する共通理解 テーマ研究の取組に関するアンケートの実施
1月	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果共有と来年度の研究テーマについての語り合い（チームごとで）
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめの作成 来年度の方向性についての確認

集中実践期間

4 チームの編成について

平成24年度の取組の成果を踏まえ、平成25年度も学部ごとにチーム編成をして授業づくりのPDCAサイクルに取り組むことにした。これは、学部ごとのチームを組むことで「授業参観や授業研究がしやすい」「児童生徒の実態把握ができており共通理解がしやすく、アドバイスや意見がチーム内で出しやすい」「実際に授業に関わり、教材・教具の準備等に協力できる」といった平成24年度の実践を通して確認できたメリットを生かすためである。

そこで、年度当初に職員全員にテーマ研究で改善に取り組みたい授業の希望調査を実施し、その結果を基に実践に取り組むチームを編成した。(表2) 職員の課題意識

が高い授業について実践に取り組めるようにすること、授業づくりの語り合いがしやすいように1チームあたりの人数が膨らみ過ぎないようにすること、学年部や教科部等も考慮して実際に授業で指導に携わる職員同士でチームを作るようにすること等を配慮した。また、メンバー内でアドバイスや意見の交換が活発に行われ、授業改善への具体的アイディアが話し合いの中で焦点化できるよう、職員の経験年数のバランス等にも配慮した。

＜表2：各チームの実践課題と構成人数＞

学部		領域・教科名	構成人数
小学部	1	国語	5人
	2	算数	5人
	3	日常生活の指導	6人
中学部	4	生活単元学習	4人
	5	国語・数学	4人
	6	自立活動（教育活動全体）	3人
	7	自立活動（時間における指導）	4人
高等部	8	国語・数学Ⅰ	6人
	9	国語・数学Ⅱ	7人
	10	音楽	6人
	11	美術	7人
	12	保健体育	6人
	13	自立活動	6人

5 チームでの授業提供

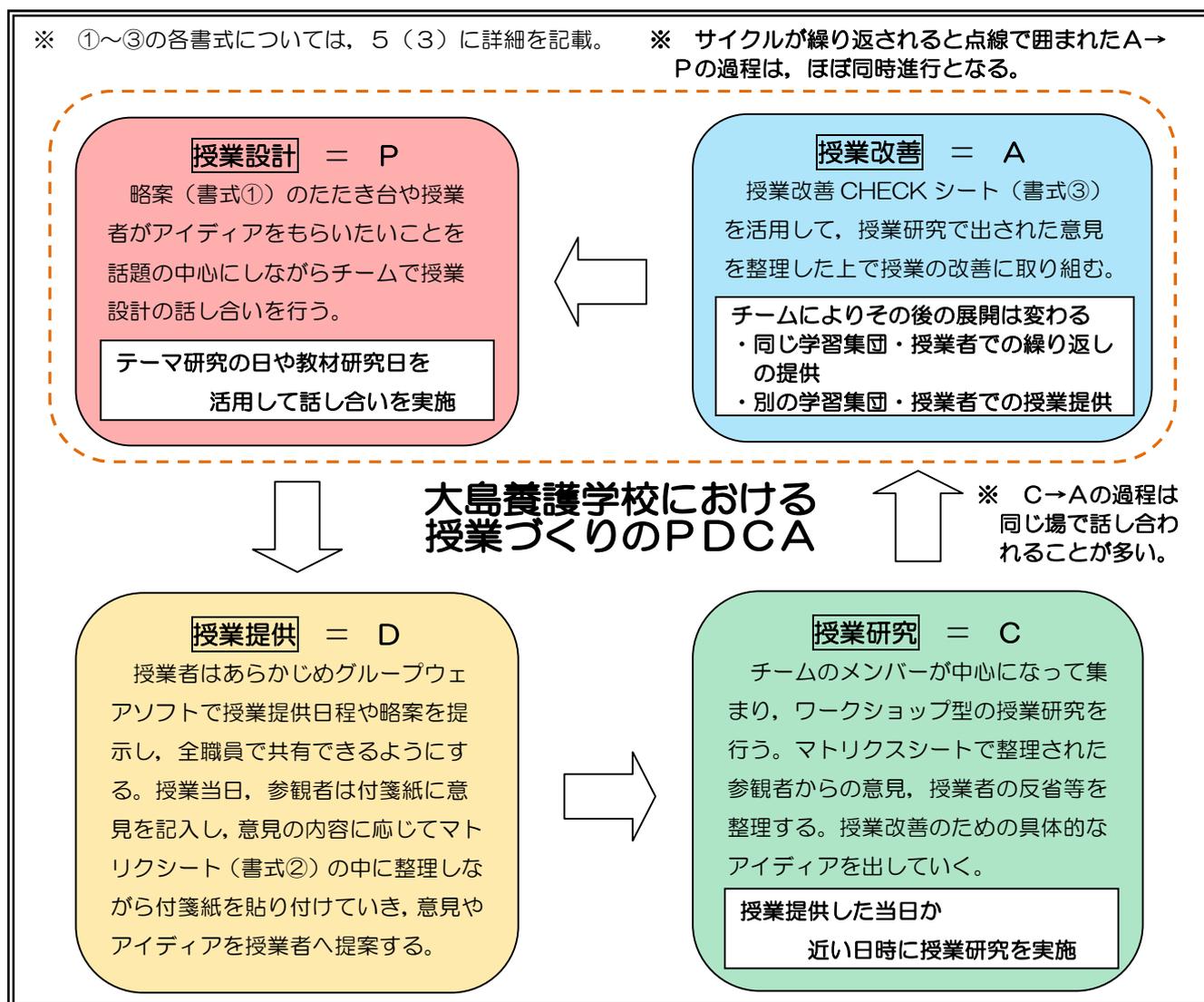
(1) 集中実践期間の設定

前年度に3ヶ月間（9・10・11月）に設定した授業提供と相互参観を行う集中実践期間は、「期間が短く児童生徒の変容が見えにくいこと」、「学校行事との兼ね合いで職員の多忙感（提供できる時期が限定されてしまう・参観が難しい・授業者の負担が増えるなど）が大きいこと」、「授業公開へつなげられるものにするにはもう少し早い時期から実践を行う必要があること」等の課題が挙げられた。そこで平成25年度は、期間を延長して余裕をもって取り組める4ヶ月間（6・7・9・10月）の設定にした。この4ヶ月の期間（授業公開の日も含む）の中で、各チームが授業提供を行った。その結果合計で39本の授業が提供され、それぞれの授業について授業改善へ向けた取組が行われた。（授業改善の取組の具体的な記録については、「4. 提供授業のまとめ」に記載）

(2) PDCAサイクルについて

本研究では、集中実践期間に各チームが授業づくりのPDCAサイクルに取り組む。本校におけるPDCAサイクルはそれぞれ「P＝チームごとで授業づくりの話し合いをする」、「D＝授業提供と授業参観」、「C＝チームのメンバーでのワークショップ型の授業研究（参観者が参加することもある）」、「A＝授業研究で出された意見を基に授業を改善し実践する」と位置付けられる。集中実践期間の中で、PDCAのそれぞれがどのように関連し、サイクルとして機能していくかについては、＜図1＞に示す。

<図1：集中実践期間におけるPDCAサイクル>



(3) 集中実践期間に使用した書式

授業提供を進めていくにあたり、前年度の反省点を踏まえ、整理・修正した上で以下の書式①～③を活用した。ここには記載事項や活用方法の概要のみ示し、具体的な書式については別紙資料①に掲載する。

書式番号・名称	書式の記載事項や活用方法等について
<書式①> 授業提供略案	<ul style="list-style-type: none"> 授業に関する基本的な情報（日時・対象児童生徒・単元や題材） 指導内容に関連する児童生徒の実態 単元や題材、指導内容と個別の指導計画との関連 参観の視点 本時の実際（期待される児童生徒の姿・指導上の留意点等）
<書式②> 参観者用 マトリクスシート	<ul style="list-style-type: none"> 導入、展開、終末の流れに沿って、「①学んでいたところ（よかったところ）」「②つまづいていたところ（気になったところ）」「③感想・意見・課題・改善策」の三つの枠組みの欄を設けたシート。参観者は気付いたことについて付箋紙に記入し、枠組みに沿って分類しながら貼り付けていく。

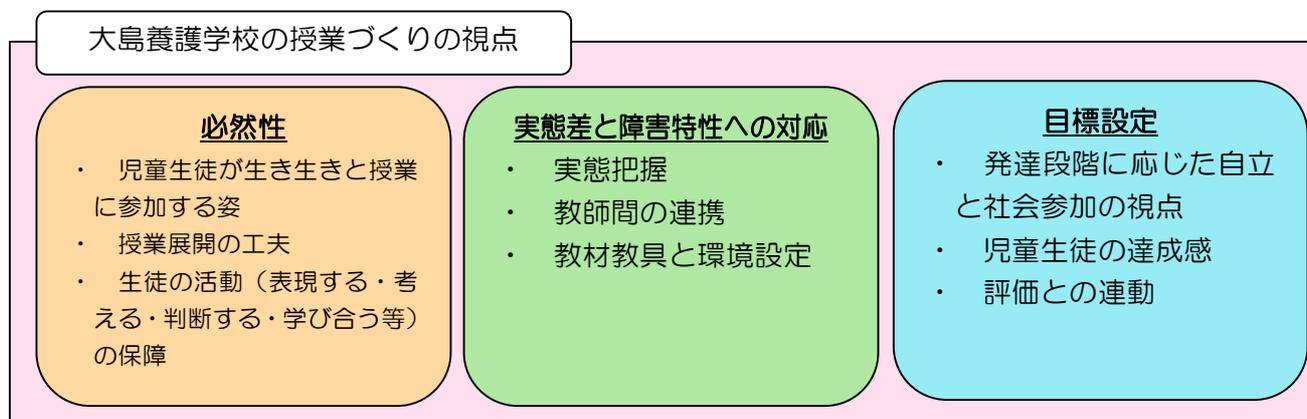
<p><書式③> 授業改善 CHECK シート</p>	<ul style="list-style-type: none"> 提供授業における児童生徒の学習の様子や課題の整理を行い、参観者からの意見や検討会で出された具体的な改善のアイデアを記録し、具体的な改善事項を確認するためのシート。
---------------------------------------	---

(4) 授業設計

ア 授業づくりの視点

前年度の取組の中で、授業設計や授業参観の際に焦点化を図るために全職員で検討して「授業づくりの3つの視点」(図2)を設定し、それを基に授業実践に取り組んだ。(検討のプロセスについては参考資料「平成24年度テーマ研究の取組について」の中の「3 授業づくりの視点」を参照) 焦点化して実践に取り組んだことで、「参観しやすい」、「授業参観の際にVTRを活用した授業提供ができた」などの一定の成果はあったが、授業設計の際に関連付けに時間を要して略案作成が難しかったり、授業づくりの視点に制限されるために授業の展開が作りづらかったりするという課題が挙がった。

<図2：大島養護授業づくりの視点（平成24年度）>



そこで、平成25年度は、上記の授業づくりの視点の検討で挙げてきた職員からの意見を生かして、鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課平成23・24年度調査研究「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究」において示された「教師の指導の評価の観点例」を参考に本校の実践で活用できるような「授業づくりや授業参観の視点例」<表3>として整理し直した。必要に応じてこの観点例を授業設計に生かしたり、指導略案の中に授業者が特に注目して見てもらいたい項目を明記して参観者が視点を絞って参観したりできるようにした。

<表3：授業づくりや授業参観の観点例>

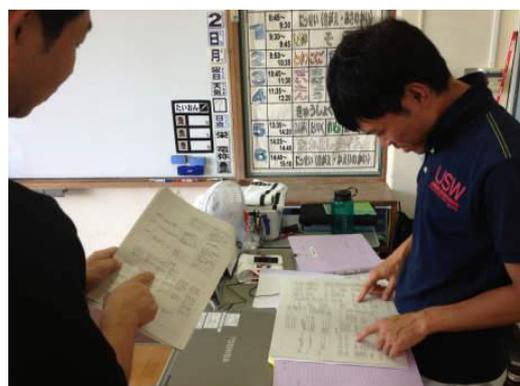
領域	観 点 例
<p>A 指導 目標</p>	<p>ア 児童生徒の実態に即したものであったか。 イ 児童生徒の重点目標を意識したものであったか。 ウ 教師が評価しやすいものであったか。(数値目標、基準の明示といった具体性)</p>
<p>B 指導 内容</p>	<p>ア キャリア発達の視点や卒業後の姿を意識して、指導内容を考えていたか。 イ 児童生徒が、興味・関心をもちやすいものであったか。 ウ 児童生徒が、見通しをもちやすいものであったか。 エ 児童生徒が、自分自身で取り組めるものであったか。 オ 児童生徒が、達成感を得られるようなものであったか。</p>

領域	観 点 例	
C 指導 方法	ア 学習活動の見通し	(ア) 学習のねらいを明確に示していたか。 (イ) 学習の流れを明確に示していたか。
	イ 言葉掛け	(ア) 具体的で、分かりやすい発問や説明であったか。 (イ) 言葉掛けが多すぎたり、少なすぎたりしていなかったか。 (ウ) できたことや取組の経過について賞賛していたか。
	ウ 個に応じた工夫	(ア) 段階的な指導をしていたか。 (イ) 児童生徒の反応を確認していたか。 (ウ) 過剰支援や支援不足ではなかったか。
	エ 主体的な活動	(ア) 児童生徒が、考える場面を設定していたか。 (イ) 児童生徒が、自己選択したり、自己決定したりする場面を設定していたか。 (ウ) 児童生徒が、自分の役割に応じて活動できる場面を設定していたか。 (エ) 児童生徒が、表現する場面を設定していたか。(伝え合い、報告、発表等)
D 指導 体制	ア 学習集団の構成の工夫がされていたか。(個別、ペア、グルーピング、習熟度など) イ 児童生徒の実態や支援方法、指導目標などが事前に共通理解されていたか。 ウ TTにおいて、指導者間の共通理解が図れていたか。	
E 学習 環境	ア 児童生徒が学習に臨みやすい学習環境であったか。(教室の整理・整頓、掲示物の精選等) イ 活動のしやすさを考慮した学習環境であったか。(机の位置、座席、動線など)	
F 教材 教具	ア 児童生徒の実態に即したものであったか。 イ 児童生徒が、興味・関心をもちやすいものであったか。 ウ 効果的な教材・教具の提示の仕方を行っていたか。 エ コンピュータなどの ICT を適切に活用していたか。 オ 教材・教具等の準備や片付けなど児童生徒ができる活動を取り入れていたか。	

イ 授業設計と授業略案の書式について

チームによる授業設計の話し合いでは、授業略案のたたき台を準備したり、授業者が特にアイデアをもらいたいことを中心の話題にして話し合ったりするなどして取り組んだ。チームのメンバーがそれぞれの経験知や専門性を発揮し、メンバー相互の学び合いの場ともなっている。また、指導の系統性や段階性についての参考資料として、東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課の作成した「知的障害特別支援学校における各教科の具体的な内容の例」を活用した。

「児童生徒の単元・題材に関する実態」や「個別の教育支援計画・個別の指導計画等から導き出される教育的ニーズ」の授業との関連を授業設計の過程で意識できるようにするために、平成25年度の授業略案の書式(先述の書式①)の中にはこれらを記入する欄を設けた。そして、「複数の目」を生かして児童生徒にとってより妥当性の高い目標の設定や1



資料を用いた授業づくりについての意見交換



チームでの授業設計の話し合いの様子

単位時間内での適切な学習活動，教師が期待する児童生徒の具体的な学びの姿などについて検討がなされた。完成した略案は，授業参観時に全職員が活用できるよう，グループウェアソフトで共有できるようにした。

このようにして，児童生徒の実態や目標，授業中の学びの姿等をイメージしながら授業づくりをする過程を取り入れたことで，授業設計（P）の部分がより充実するようにした。

ウ 提供授業の各チームにおける選定

児童生徒の学びの姿の変容に着目し，その変容を確実に追うためには，同じ学習集団で同じ単元題材を繰り返して授業提供に取り組み，P D C Aサイクルに取り組むことが重要である。しかし，本研究ではより多くの職員がP D C Aサイクルの実践に取り組めるようにすることで学校全体の授業設計力の向上を図ることも重要であると考えた。そこで，提供する授業については，各チームの課題や実情に合わせてチームごとに選定を行った。そのため，同じ学習集団で繰り返し授業提供に取り組んだチームもあれば，複数の学習集団を対象に授業提供に取り組んだチームもあった。

前者では，児童生徒の変容や授業改善は明確になりやすいが，後者についてはP D C Aサイクルの重要な部分である「C→A」の部分の取組が不十分になることが考えられた。そこで，先述の<書式③ 授業改善CHECKシート>を活用して，P D C Aサイクルが途中で止まることなく機能し，児童生徒の変容や改善の取組を意識的にチーム内や個人でセルフチェックできるような工夫を行った。

また，経験年次別研修（ステップアップ研修やパワーアップ研修）における研究授業を集中実践期間の提供授業として実践を行うチームもあった。

(5) 授業参観と授業研究

ア 授業参観

集中実践期間中に提供される授業については，事前にグループウェアソフトで日時を共有し，同じチームの職員や同じ学部の職員を中心に授業参観を行った。また，可能な限り管理職や他学部の職員も参観し，先述の「参観者用マトリクスシート」を用いて授業改善についての意見を参観者から集約した。

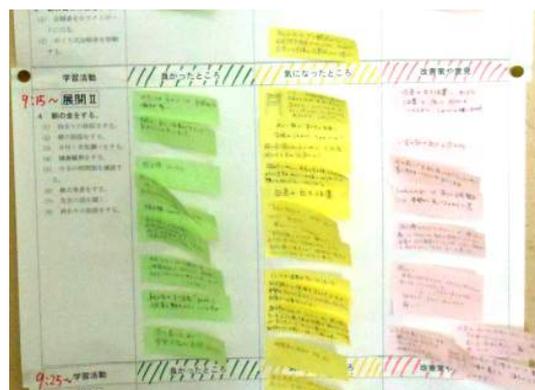
今年度も参観できない職員のためにV T Rでの授業提供を行ったチームや，児童生徒の授業への集中のしやすさ等を考慮し，ビデオカメラと大型テレビを活用して実況中継的に廊下での参観の場の設定をするという試みに取り組んだチームもあった。



大型テレビとビデオカメラを活用した授業提供

イ マトリクスシートと付箋紙の活用

<書式②>のマトリクスシートと付箋紙を授業参観で活用することは，自由に意見を出しやすいということや，意見集約がしやすいということ等のメリットがある。本研究では，全ての提供授業において，これらを活用した。付箋紙への意見の記入の仕方については，事前に共通理解をしておくことでより参観者が意見を書きやすくなり，集約後の意見の焦点

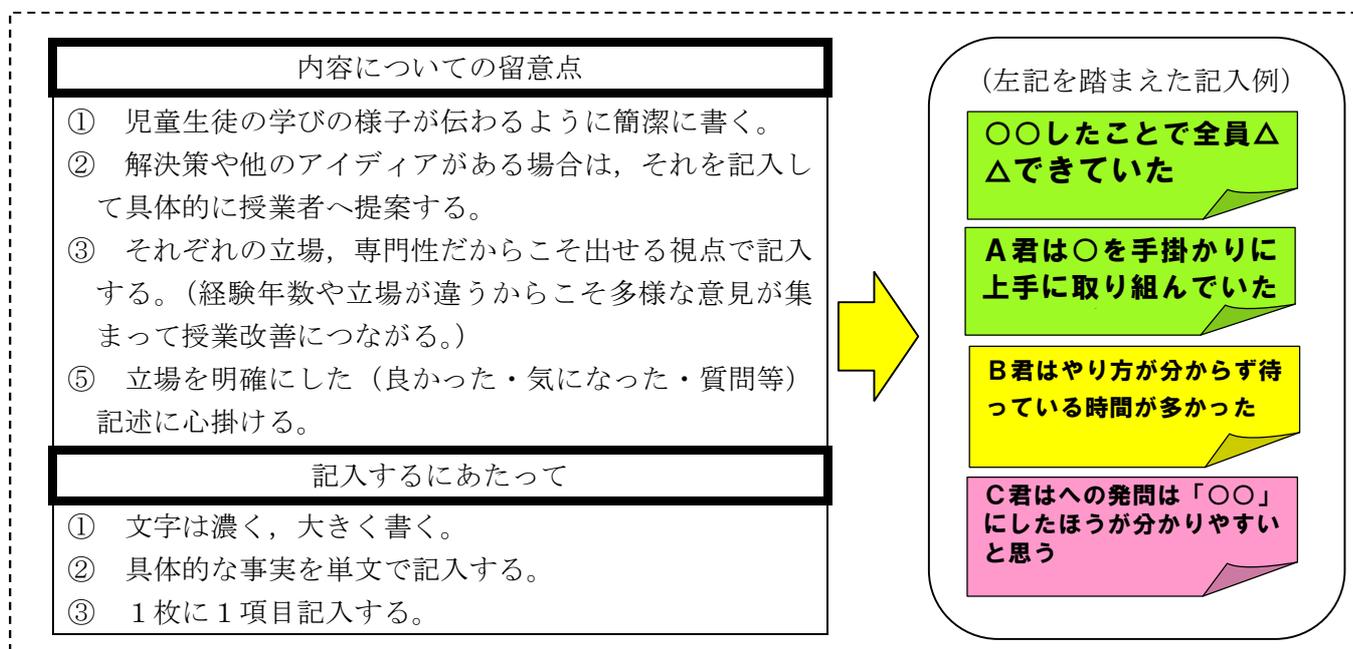


マトリクスシートに貼られた意見の書かれた付箋紙

化も容易になることが取組を通して明らかになってきた。(※共通理解の具体的内容は図3を参照)

授業参観を通して、気付いたことや改善点を付箋紙に記入する経験を繰り返したり、他の職員の付箋紙の記述を参考にしたりすることで、職員が「授業を見る目」が養われていくことにもつながった。

＜図3：授業参観の際の付箋紙の記入の仕方について＞



ウ 授業研究と授業改善

集中実践期間中に授業提供を行った後は、各チームで授業研究を行う。授業研究は、「付箋紙で集めた参観者からの意見」、「同じ意見の付箋紙が集中した部分」、「授業設計の中で意図的に設定した指導の流れや手立て」、「教材・教具」、「授業者が立てた討議の柱」等を話題にして小集団で自由に意見を交換しながら行い、具体的で取り組みやすい授業改善策を話し合うことに重点を置くようにした。そうすることで「C→A」に即座に取り組むことができ、確実に授業改善につながると考えたからである。

チームでの授業研究を行うにあたって、一定の流れ(別紙資料②「ワークショップ型授業研究の流れ」)を設定した。しかし、集中実践期間中の授業研究では小集団(多くても7～8人)で行われることが多いので、流れや形式にとらわれずに小集団のメリット(自由度の高さ、気軽さや話しやすさ)を生かした授業研究が行われた。

経験年次別研修の研究授業として集中実践期間中に提供された授業(小学部及び中学部)については、前述の「ワークショップ型授業研究の流れ」に沿って大人数(10人以上いるような集団)での授業研究を行った。ワークショップ型での授業研究の実践の積み上げを通して、進め方等に修正を加え、授業研究の活性化のためのより良い進め方についても探っていった。

(高等部では経験年次別研修の研究授業の時期が合わず、授業研究が実施できなかったため、他学部でのワークショップ型授業研究の取組を基に資料や動画等を活用して研修を行った。)

6 授業公開について

平成25年11月に本校にて「鹿児島県授業力向上プログラム」における授業公開を実施し、各学部からの授業の公開と併せて2年間の「授業づくりのPDCAサイクル」の実践の成果を公開し



全体会での研究概要の紹介

た。当日は、大島地区の小中学校の職員や行政関係者、施設職員、県内の特別支援学校の職員等の参加があり、本校の研究の取組やマトリクスシートと付箋紙を活用した授業参観の方法、ワークショップ型授業研究の進め方等について紹介をした。また、各学部の公開授業を参観してもらった後には、参加者を交えて本校職員と一緒にワークショップ型の授業研究を行い、授業づくりの取組に実際に加わってもらいながら本研究の内容を体験的に知ってもらえるようにした。会の最後には、公開授業やワークショップ型の授業研究について県教育センター特別支援教育研究課 奥政治係長より指導助言をいただき、これまでの研究の取組の成果や課題を確認することができた。

参加者に実施したアンケートからは、本校の授業実践に関して高い評価をたくさんいただいた。本公開は、これまでの本校での授業実践の有効性について再確認することができた貴重な機会であった。



公開授業での参観の様子

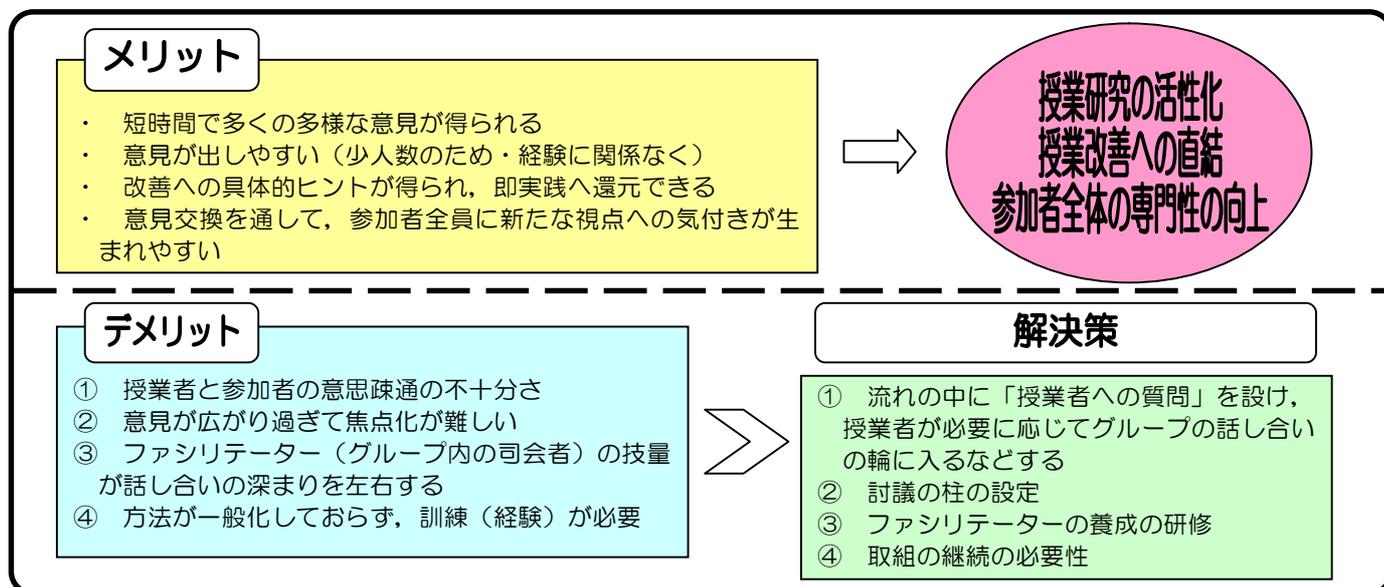
7 ワークショップ型授業研究について

集中実践期間を通して修正を加えながら確立させてきたワークショップ型の授業研究の進め方について、メリットやデメリット、改善策について整理する取組を行った。整理作業は、これまで実践に直接携わって協力しながら取り組んできたチーム単位での話し合いを行い、取組に学部間の差異や学部独自の進め方が生じてきていることを踏まえて、学部ごとに意見集約を行った。(学部ごとの集計結果については、別紙資料③ワークショップ型授業研究についての意見集約を参照)

その結果、これまで行われてきた従来の「授業者対フロア全体」の授業研究の形式にはない「ワークショップ型」のメリットが明確になった。＜図4＞しかし、本校で整理してきたワークショップ型授業研究の進め方にはデメリット（課題）もあることが明らかになった。(これらの課題に対しては、話し合いの中で具体的な改善策も出されている。)

ワークショップ型の授業研究に取り組み、メリットやデメリットを整理したことで、今後は授業研究の目的、参加人数、時間的余裕、参加メンバーの教職経験年数や専門性といった面等を考慮したうえで、2つの授業研究の方法（「授業者対フロア全体」と「ワークショップ型」）を選択することも可能になった。授業の改善や授業者の専門性の向上につながる活発な授業研究とするために、ひとつの選択肢としての「大島養護学校のワークショップ型授業研究」を確立することができた。

＜図4：本校の実践を通して確立したワークショップ型授業研究の方法に関するメリットとデメリットについて＞



8 アンケート集約結果より成果と課題の分析

今年度の実践の成果と課題の確認、仮説の検証のために職員にアンケートを実施した。〈別紙資料④〉アンケートの集計結果を抜粋しながら本研究の成果と課題について整理していく。

(1) 集中実践期間の取組を経てPDCAサイクルの活性化が図れたかどうかの実感について

〈アンケート「質問Ⅰ－1」集計結果（抜粋）〉

	小	中	高
A とても実感できた	31%	19%	3%
B 実感できた	63%	81%	20%
C 普通	6%	0%	57%
D あまり実感できなかった	0%	0%	20%

学校全体としては、活性化を実感できた職員が多かったことがうかがえる。ただし、評価についての客観的基準がないことを踏まえながら、結果に学部間のばらつきあることについて考察が必要である。

高等部の評価理由に関する記述から、「指導体制上教科担当者単位のチームでの授業づくりの取組がすでに存在していたこと」や「授業参観が難しく（1回も授業参観に行けなかった職員が22%）PDCAサイクルの機能に課題を感じた職員が多かったこと」等の意見が挙げられた。これらのことが、集中実践期間を経てPDCAサイクルが活性化したという実感の乏しさにつながったと考えられる。また、集中実践期間とそれ以外の期間での時間的・人的条件の違いはほとんどなく、時期を設定して略案等の共通書式を活用して“意識的に”取り組んだだけに過ぎないとも言えることも実感に乏しかった理由の一つとして考えられる。

小・中学部では、担任を中心に指導にあたっている授業が多く、主にペア担任間のみでこれまで取り組んできた授業づくりを小集団の“チーム”で取り組むことで、「様々なアイデアをもらえる」「一人で悩んでいた授業のことを気軽に語り合えるようになった」「授業後に意見をもらえることで次の授業に生かすことができた」等の感想をもった職員が多かったことが満足度の高さにつながったのではないと思われる。

小集団のよさを生かすことや、授業について話題にする機会を設定すること、気軽に子どものことや授業について語る雰囲気づくりをしていくことがPDCAサイクルの確立のために重要であることが分かる。

(2) 授業参観の体制づくりについて

〈アンケート「質問Ⅰ－3」集計結果（抜粋）〉

	小	中	高
A 参観計画を立て、授業参観に行ける体制を学部で整えた上で参観した	23%	13%	0%
B 自分の所属するチームの授業提供だったため、ペアの先生に授業をお願いして参観した	36%	38%	17%
C 1単位時間全ては参観できなかったがペアの先生や学部の職員で交代しながら参観した	27%	50%	37%
D 空き時間を活用した	9%	13%	40%

本校の実践では、職員の協力体制で多くの職員が相互に授業参観を行うことができ、授業改善に向けた取組を進めていくことができた。

一方、参観できなかった職員も多く存在しており、このことについては昨年度から課題になっていた。特別支援学校において、全ての児童生徒の授業保障をしながら職員相互の授業参観を推進す

することは難しい状況にある。しかし、相互に授業参観を行うことで授業改善や職員の専門性の向上につながっていくということは、アンケート結果（質問Ⅰ－４）で職員も十分実感をもって認識していることが分かる。そこで、今後も授業参観を相互に行えるように、学部・学校全体での参観計画の作成や、指導体制の工夫が必要不可欠である。また、空き時間をもつ職員との交代制での参観やVTRの活用、授業を提供する側の参観の視点（特に意見をもらいたいところ）の絞り込み等の工夫を進めていくことが重要になってくると思われる。今後は、「1単位時間全てを参観しなくても指導案等を基に授業について語り合うことができる」ということも特別支援学校の教師の専門性の一つとして位置付けられると考え、意識的に専門性の向上に努めていく必要があると考える。

(3) 取組を通して職員自身が感じた変容

アンケート「質問Ⅰ－４」で本研究の取組を通して感じた成果や教師自身の変容について回答してもらった。ここでは、全学部を併せて再集計したものの中で40%以上が「あてはまる」と答えた項目を以下に示す。

<p><授業づくりの話し合いをすることで> 一人一人の実態について丁寧に考えることができた 54% 授業づくりの視点が明確になった 49%</p>
<p><授業提供・授業参観をすることで> 参観することで他の先生の良いところ（指導方法やスキル）を学ぶことができた 69%</p>
<p><ワークショップ型の授業研究をすることで> 児童生徒への適切な指導であったかを振り返ることができた 40% 授業の改善について具体的なアイデアやヒントを得られた 57%</p>
<p><教師同士> 児童生徒の指導目標の共有化ができた 43% 児童生徒の学びについて語り合うことができた 43%</p>
<p><教師個人> チームで話し合いに取り組む中で新たな知見や実践へのヒントが得られた（専門性の向上） 57% 授業を改善していこうという意欲が高まった 48%</p>

評価に関する客観的基準が明確ではないため、集計結果の%だけでは一概に評価し得ないところもあるが、授業づくりのPDCAサイクルに小集団で取り組んだことや、集中実践期間で授業提供と相互に授業参観をしたことで多くの職員が実感した成果として、「①授業づくりの話し合いの中で実態について丁寧に考えることができた」「②授業参観をすることで他の教師の指導法やスキルを学ぶことができた」「③授業研究で具体的なアイデアを得られた」「④チームでの取組が学び合いにつながり、教師の専門性の向上につながった」の四つが特に多く実感された変容として挙げられた。

①については、集中実践期間に共通で用いた授業提供の略案の形式に「単元に関する児童生徒の実態」「個別の指導計画との関連」の二つの項目を設けたことで意識的に児童生徒の実態について語り合うことができたことが要因の一つとして考えられる。また、授業提供者が準備したたたき台の略案を基にした目標設定や提供授業における活動内容等を検討する語り合いを行うことが、これまでの漠然とした授業設計の話し合いと比べ、より一歩踏み込んだ形で児童生徒の実態を丁寧に追うことにつながったのではないかとと思われる。

②については、参観した授業から多くのことを学ぶことができた職員が多かったことを示唆している。授業参観を繰り返すことで、効果的な支援や指導について気付くことができるようになった職員が多かったのではないかと思われる。また、集中実践期間の授業参観で使用したマトリクスシート（書式②）の中に「よかったところ（学んでいたところ）」について記入した付箋紙を貼る欄を設けてあることで、授業参観の際により点に意識的に注目することにつながったのではないかと考えられる。さらに、参観者が付箋紙を貼り終わったマトリクスシートには、参観者全員の「よかったところ（学んでいたところ）」に対する気付きが凝縮されており、マトリクスシートを活用していく過程でさらなる「よかったところへの気付き」につながっているようであった。

③については、ワークショップ型授業研究における「双方向型」の特徴を生かして活発な意見交換が各チームで行われたことが要因として挙げられる。小集団での授業研究は「短時間で多くの多様な意見が得られる」「意見が出しやすい」「意見交換を通して、参加者全員に新たな視点への気付きが生まれやすい」といったメリットがある。これらを生かして授業改善の具体的アイデアを話し合うことに焦点化された授業研究が、各チームで行われたことがアンケートの回答に反映されているようである。

④についても、小集団のチームでの気軽な話し合い、各自の経験年数や専門性を発揮しながらの授業に関する語り合い、指導観に関する意見交換などが専門性の向上の実感につながったと考えられる。特に経験年数の少ない職員は、チームのメンバーから直接アドバイスをもらえることで、レベルアップの実感を得られたのではないかと推測される。

以上のことから、仮説で挙げた「研究に取り組むことを通じて、経験年数の異なる教師集団であっても、経験知を伝え合い、互いの教育に対する思いを尊重し合い、語り合いを深められる学校の雰囲気醸成につながるのではないか」「教師集団としての授業設計力の向上につながるのではないか。」の二点については、本研究の成果が現れたのではないかと判断できる。

一方、職員が成果を実感できた項目に対して、成果の実感に乏しかった項目もあった。本研究の仮説「小集団で授業づくりのPDCAサイクルに取り組むことが授業改善につながり、児童生徒の変容や成長につながる」の関連としてとして挙げていた質問項目「児童生徒の変容を実感できた」については、全体で18%の職員しか実感をもてなかったことが明らかになった。今年度の研究は指導体制の研究が中心であった。そのため、児童生徒の変容を詳細に追いたかったが、チームでのそれぞれ独立した取組であったことや児童生徒の変容に関する客観的指標を係から提案できなかったことで、結果的に授業改善による児童生徒の変容を実感できないままの研究となってしまった。授業提供者自身は授業改善を通じた児童生徒の変容を意識できていたが、研究を進める中で学校全体としてその実感を共有しながら進めることができなかつたことは係としての反省であった。このように、研究の中心に児童生徒の学びの変容を据えることがどうしてもできなかつたために、仮説「小集団で授業づくりのPDCAサイクルに取り組むことが授業改善につながり、児童生徒の変容や成長につながる」については、本研究の方法では成果に乏しいものであった。

その他に「授業参観をされることへの抵抗感が少なくなった」「授業実践のよい取組の共有化が進んだ」「教材研究日の有効活用ができた」といった項目についても成果の実感が低かつた。今後の改善の取組の必要性が感じられる。

(4) 授業づくりPDCAサイクルの取組が継続するために＜「質問I-6」の結果より＞

小学部で行われている授業づくり部会（学部会のない火曜日に音楽・体育、生単、遊びの指導といった合同で行われる授業のチーフと部員が集まり、現在指導している単元・題材の反省・検討と次から行う単元・題材の指導内容や指導計画の確認・検討を行う）のような定例の打ち合わせの必要性を感じている職員が多いことがうかがえる。しかし、単に時間を確保して「定例化」するだけでなく、何を話題にするのか（児童生徒の実態・目標の共有、指導の仮説、教材・教具

等)を明確にした上で打ち合わせをすることが会の質を高め、意義あるものとするために重要である。また、本研究の中で見えてきた「複数の教師の視点」の良さを生かして通常から小集団での指導体制の構築を行い、お互いに意見交換しやすい雰囲気を形成していくことが授業づくりのPDCAサイクルを効果的に循環させていくためのポイントになってくると考えられる。

「質問Ⅲ-2」の結果から、本校ではすでにペア担任同士の枠を越えた複数の教員による授業づくりの具体的な実践がすでに行われており、本研究の成果を生かしながらさらに充実した授業づくりの取組を今後も進めていくことが重要である。



新しい単元前の打ち合わせの様子
(中学部美術)

(5) 授業提供者の視点から「質問Ⅱ-1, 2, 3, 4, 5, 6」の結果より

＜アンケート「質問Ⅱ-1：授業設計の話し合いの満足度について」集計結果＞

	小	中	高
A とても満足	22%	20%	5%
B 満足	56%	70%	45%
C 普通	22%	10%	45%
D 少し不満	0%	0%	5%
E 不満	0%	0%	0%

「複数の視点からのアイデアがもたらされた」「課題に対する具体的な改善策を得られた」「話し合いが複数回行えた」等授業提供をした職員の満足度はおおむね高かった（「質問Ⅰ-4」の結果でも同様の成果が挙げられていた）が、話し合いの時間・回数に関することや、話題が挙がり過ぎて消化不良であった点等について課題を感じている授業提供者もいた。

どの学部においても、授業提供前に1～2回話し合いの機会を設け、おおよそ30分～50分間という時間設定をして、授業設計を行っているところが多い。また、授業研究についてもおおむね同じような時間を設定して取り組んだチームが多かったようである。しかし、同じ時間・回数設定でも授業提供者の満足度に差が出ている点から、「話し合いの際にどんなツール（略案のたたき台や個別の指導計画等）を用いて」、それを基に「話題を焦点化（どんなことを話し合い、話し合いのゴールをどう設定するか）」しなければ、時間的なロスや、消化不良の感覚が残ってしまうことになると思われる。

普段の授業づくりの際に話題に挙がっていることについては、「質問Ⅲ-4」の回答の中で明らかになっているが、授業づくりの視点をより明確に焦点化するためにも、先述「表3」で示した「授業づくりや授業参観の観点例」の活用を図っていく必要がある。

(6) 個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用した授業づくり

＜アンケート「質問Ⅱ-7」集計結果＞

	小	中	高
A 十分できた	0%	11%	0%
B できた	50%	78%	45%
C 普通	38%	11%	35%
D あまりできなかった	12%	0%	5%
E できなかった	0%	0%	5%

教育支援計画や指導計画との関連を意識した授業づくりの取組に関しては課題が多く残ったことが明らかになった。アンケートの自由記述から、「目標達成のための授業内容や手立てについて…と一連のつながりのある授業づくりができた」「略案作成や授業設計の話し合いの中で活用できた」、「教育支援計画を活用して将来像を意識した授業づくりができた」、「個別の指導計画の重点目標との関連を意識した授業展開ができた」、「目標設定がしやすかった」等の成果があった一方で、「提供授業の単元・題材と指導計画の重点目標の関連項目が少なく活用できなかった」、「授業略案を最初に作成する際、個別の指導計画を活用できたが、その後は児童生徒の実態や変容よりも授業をどう進めるのかということに力点が移っていくような傾向にあった」「授業設計のヒントは日頃の授業から考えられることも多かった」「以前より意識できるようになったがまだ不十分」等の課題が多く挙げられた。

この「質問Ⅱ－7」の結果で、特に中学部での評価が高いことが注目される。中学部では、集中実践期間内に3本のステップアップ研修（5年経験者研修）の研究授業が提供され、チームでの授業設計の語り合いに加えて学部全体での「指導案検討→研究授業→ワークショップ型授業研究」が行われた。そういった過程の繰り返しの中で「活用の実感」をもつことができた職員が多かったのではないかと推測される。「実際に教育支援計画や指導計画を手にとって確認する」機会の設定がまずは望まれる。

本校では個別の教育支援計画や個別の指導計画は、定例のケース会や保護者とのミーティングといった場面を中心に活用している。作成・活用に関しては新転任者研修の中で年度当初に扱い、学部内で重点目標一覧を配付して共通理解をした上で、授業づくりに活用している。しかし、職員内で具体的な活用法や重点目標の設定の仕方について研修を深める機会が少ないという現状もある。今年度は、校内支援係より活用についての資料（年間のスケジュール）が出されたり、初任校研修の中で行われた「個別の指導計画」に関する研修（演習形式）を他の職員にも開放した形で実施したりと、活用をさらに促すための取組が行われている。

今後もさらなる活用が図られるよう、校務分掌等で活用の具体的な方法や体制づくり（例：小学部で行われている授業づくり部会のような場で、実際に各児童生徒の重点目標を確認しながら授業設計を行う等）を進めていく必要がある。また、職員が「活用できている」という実感を持てるような活用事例や、目標設定の在り方と授業の関連付けの具体的モデルについて共通理解の機会を設けていく必要がある。

(7) 授業づくりの現状における課題について

＜アンケート「質問Ⅲ－1」集計結果 全学部を併せ再集計したもの＞

課題に感じている項目	全学部計
個別の指導計画（重点目標）と授業の関連	56%
チェックリスト（※）の活用	56%
授業づくりの時間確保	49%
実態差への対応	46%

※ 本校で使用しているチェックリストには、「生活習慣」「身体運動」「集団参加」「コミュニケーション」「社会生活（身辺処理・身体・運動、情緒・対人関係、地域生活・余暇）」「国語発達段階」「算数・数学発達段階」がある。

本研究では、「授業づくり」を主題に据えて研究を進めてきたが、普段（本研究で取り組んだ実践集中期間以外）の授業づくりにおける課題について質問をしたところ、全体では上記の四つが特に課題意識が高い項目であることが明らかになった。また、上記以外で学部ごとに課題性の高かったものは、小学部では「教材・教具の作成、教材の共有化、指導内容の設定、指導の順序性

や段階性」、中学部では「教師の評価、教材の共有化」、高等部では「目標設定や目標の共有化、自立活動との関連」が挙げられた。職員がそれぞれに感じている課題は多岐にわたるため、学校全体で授業づくりをサポートしていく体制づくりが望まれる。また、アンケートやテーマ研究の取組の中で、特に経験年数の少ない職員を中心に「授業づくり以前に特別支援教育に関する専門性のさらなる向上が必要」という意見も多く見られたことも今後の本校の課題として認識しておく必要がある。

課題が多く挙がっている一方で注目すべき取組も校内で行われている。たとえば、チェックリストの活用については「新しい活用方法（チェックリストは個人ファイル内にあってなかなか活用できないという現状があり、ファイルからチェックリストを独立させて手元に置き、日々の指導に生かす。）」を進めていこうとする動きがあり、課題を感じていながらもそれを解決しようとする自発的な取組が校内で進んでいる。今後のさらなる取組が期待される場所である。

本校における授業づくりのPDCAサイクルを充実させるためには、本研究の成果を還元することはもちろん、上記課題に関連する校務分掌等の協力を得ながら授業づくりをサポートしていく体制をさらに校内に整備していく必要がある。今後の本校の授業の質の向上につながるものと思われる。

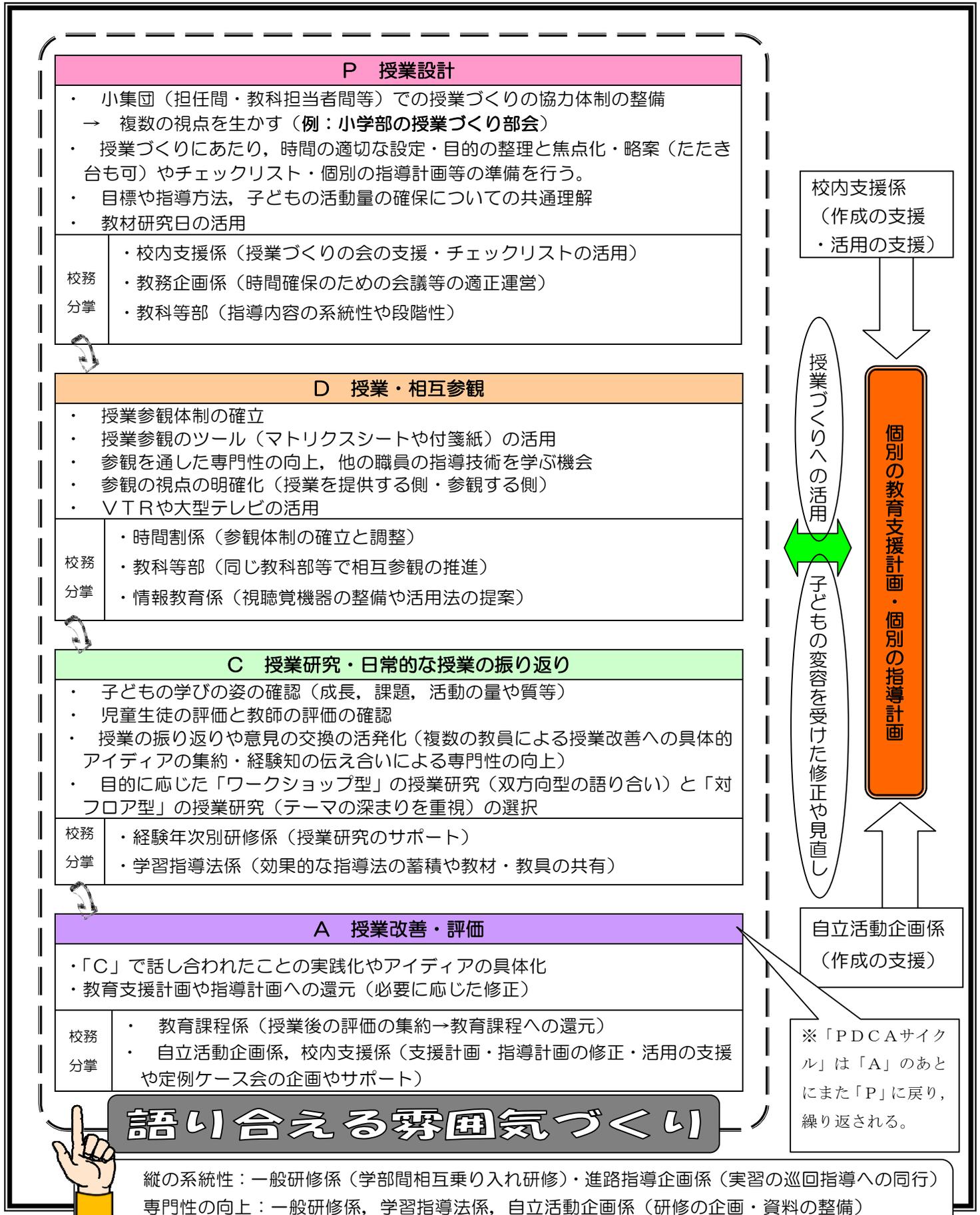
9 まとめ

本研究の成果と課題を踏まえた継続可能な授業づくりのPDCAサイクル在り方と校務分掌等に期待される役割について、本研究の成果の最後のまとめとして次ページ<図5>に示す。

<参考文献>

- ・千川隆 監修 熊本教育大学附属特別支援学校 編著 ジアース教育新社
「ポラリスをさがせ～熊大式授業づくりシステムガイドブック～」(2012)
- ・石塚謙二 監修 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著 ジアース教育新社
「知的障害教育における学習評価の方法と実際」(2011)
- ・肥後祥治 雲井未歆 片岡美華 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校編著 ジアース教育新社
「学習指導案と授業研究 子どもたちが学ぶ楽しさを味わう授業づくり」(2013)
- ・鹿児島大学教育学部附属特別支援学校
「研究紀要第19集」
- ・鹿児島養護学校
「平成23年度 授業実践協議会資料」
- ・鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課 平成23・24年度調査研究発表資料
「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究」
- ・鹿児島県総合教育センター平成22・23年度プロジェクト研究資料
「授業力を高める校内研修の進め方」

<図5：本研究の成果と課題を踏まえた本校で継続可能な授業づくりの在り方，校務分掌のサポート体制>



4 提供授業のまとめ



提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III・IV課程	授業提供者	原 正憲
教科・指導の形態	国 語	単元(題材)名	ものの名前

<p>1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)</p> <p>○ グループ共通の参観の視点</p> <p>1 教材教具の使用法・提示の仕方や場の設定は適切だったか。</p> <p>2 子どもが意欲をもって取り組むことのできる学習内容だったか。</p> <p>1について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本を子どもたちにめくらせることで意欲が増していた。 ・ 鬼パズルに興味を示していた。 ・ 教師の教材提示の仕方が分かりやすく, 子どもたちも何をしているのか理解しながら進めることができていた。 ・ 文字を並べるときの「枠」の大切さを実感した。 <p>2について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の積み重ねで見通しをもって取り組むことができていた。 ・ 鬼パズルで, 体の部位の名称を①言う②貼る③触るが定着していた。 ・ 平仮名を並べる作業で少しずつ文字が増えていく(スモールステップ)ことができていた。 ・ 本人の好きなキャラクターのシールを使ったことで, 意欲が高まっていた。 ・ めあてが明確にあり, まとめとして確認作業もありいいと思う。宿題で更に定着を図る。家庭との連携。親も成長を感じられる。 ・ 子どもの実態に合っている言葉を選んで平仮名の学習に取り組んでいた。 ・ 頑張ったことの発表では言葉にできない子どもは写真を指差して確認することができていてよかった。(選択肢の提供)
<p>2 授業提供後の検討会で話し合ったこと</p> <p>① 平仮名ブロックをするとき, 子ども自身に答え合わせをさせることで, より身に付くのではないか。</p> <p>② 「読む」活動だけでなく, 「書く」はしないのか。 → 今は「読む」活動が楽しいので, そちらのみ取り扱う。</p> <p>③ かるた取りの要素を取り入れ, 読み間違いを起こしやすい文字を学習してはどうか。</p>
<p>3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点</p> <p>① 自分で一文字ずつ確認するようになった。</p> <p>② 生活単元学習等で, なぞり書きを意識的に取り入れている。</p>
<p>4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)</p> <p>◎ 自分で確認しながら進めていくことで, より課題に意欲的に取り組むことができるようになった。</p> <p>◎ 正しい書き順を意識させながら, 徐々になぞり書きを取り入れている。</p> <p>◎ 平仮名が読めるようになったことで, 合同学習でも文字を読む場面で積極的に発表するようになってきた。(クラスの授業では読める平仮名を中心に読んでいた。)</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III課程	授業提供者	竹中 治
教科・指導の形態	国 語	単元（題材）名	童話・物語

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

（期待される児童生徒の姿，支援計画，指導計画の重点目標，授業づくりの視点，教材・教具，導入や指導過程工夫等について）

- 本時や単元の目標と指導計画について
 - ・ 児童の実態をチェックリストや重点目標を活用して，一単位時間の目標と単元の目標を設定する。
- 教材について
 - ・ 児童の実態に応じた絵本を選定する。
 - ・ 児童が興味がある内容であるか，高学年としてふさわしいものであるか，昨年度の取組などを参考にし，絵本を選定すること。
- 指導の工夫について
 - ・ 一単位時間や単元間で繰り返し指導を行い，学習を深めるようにする。一単位時間では，導入と終末で読み聞かせを行う。また，単元では，前時の学習を本時の導入で振り返る。
 - ・ 児童が興味をもって取り組み，理解がより深まるための手立てを準備する。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 教材の提示と言葉掛け
 - ・ 鉛筆や教具が机上に多くなってしまったため，児童が遊びに入ってしまう様子が見られた。また，順序を示すための箱を提示するときに説明や言葉掛けが足りなかった。
- ② 児童の課題設定
 - ・ 個別に課題を代えて取り組んだのだが，見積もっていた時間より早く終わってしまい，児童が他の児童を待っている時間が長くなり，集中力が途切れてしまった。
- ③ 児童が集中できる場の設定についての工夫が必要である。

3 2を受けて，授業改善に取り組んだ点

- ① 教材の提示と言葉掛け
 - ・ 教材や学習用具を必要最小限とし，児童の集中ができる環境作りを行った。
- ② 児童の課題設定
 - ・ 個々の課題設定するときに，個々の作業時間について，より意識するようになった。
 - ・ 予備の課題を準備しておき，待っている時間をなくすようにした。
- ③ 学習内容に応じて，T1とT2の2グループを分けて活動することで，児童により深い指導をすることができた。

4 授業改善の成果と課題，児童生徒の変容について（成果…◎，課題…△）

- ◎ 児童の作業量と時間を考えて課題を与えることで，児童が集中して学習に取り組めるようになった。
- ◎ 教材を提示するときに，言葉掛けを以前より意識するようになり，少ない言葉で明確に，絵カードを使いながら指導することで，児童の活動がスムーズに流れるようになった。
- ◎ 一斉指導ではなく，グループに分かれて活動することにより，個々の児童と向き合う時間が増え，学習に深まりが見られた。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III課程	授業提供者	嘉村 徳紀
教科・指導の形態	国語	単元(題材)名	童話・物語

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> 動作化のときは, 椅子や机を後ろに引き, 教室の真ん中を使って行う。机上での学習と動作化の学習との区切りがついた方がよい。(場の設定) 平仮名(文字)の筆順は正しく覚えさせた方がいいのではないかと。(文字スライドを活用したり, これから学習する漢字は正しく覚えさせたりするとよい。) たくさんある学習活動のうち, 一人ひとりの児童が輝ける場面を設定する。(個人の目標の設定) 教材の開発(ワークシート, ペープサート等) S Tとの連携について
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<ul style="list-style-type: none"> 順番を表す言葉(「最初に」「次に」「最後に」)を概念的に理解しているのか。 ホワイトボード(移動式)は, 児童の目線が高くなるので, 小さなホワイトボードで児童の目線の高さに合わせた方がよいのではないかと。 ペープサートで大やぎさん⇒青, 中やぎさん⇒黄, 小やぎさん⇒赤の洋服を着ていたもので, 名前だけでなく色に注目した言葉掛けをしたらどうか。 個別学習の課題を一つのかごにまとめて入れていたので, 個々のかごを準備するとスムーズに課題に取り組みたり先が見通せたりするのではないかと。また, 難易度を時間差で変えて, 一人で取り組む時間や教師と一緒に取り組む時間を設定してはどうか。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<ul style="list-style-type: none"> 物語に登場してくる人物の順番を表す言葉を「最初に」「次に」「最後に」から「1番目の」「2番目の」「3番目の」という表現に変えた。 ペープサートや絵本の他に, より内容を理解させるために, ビデオ絵本(動画)を活用した。また, 物語に合わせた手遊び歌を取り入れ, 楽しみながら物語のあらすじを覚えられるようにした。 色に興味を持っているので, 登場人物の色を意識した言葉掛けを行うことで, 内容の理解がより深まった。 個別学習のとき, それぞれの課題入れ(かご)を準備することで, 教師も児童も取り組む内容や量を見通せるようにした。 ペープサートの位置が児童の目線より高かったため, ビデオ絵本(動画)を視聴する際は, 床にマットを敷いて座ってリラックスしながら視聴した。
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 「1番目」「2番目」という順番を表す言葉は, 次の単元「劇」においても有効だった。単元だけでなく, 全体を通じた表現の仕方でより定着が図れた。</p> <p>◎ 音読を通してカタカナをいくつか読んだり, 漢字にも興味があることが分かったりした。今後はいくつかカタカナが読めるのか実態把握をし, 平仮名からカタカナへ, 平仮名から漢字へと文字の世界を広げていきたい。</p> <p>△ 個別学習の時間に集中して取り組めるときもあるが, そうでないときもある。内容や言葉掛けを工夫しながら個別学習に集中して取り組めるようにしたい。また, 個別学習の約束事を定着させ, 一人でも個別学習に取り組めるような環境づくりに努めたい。</p> <p>△ 文字(平仮名)の筆順がばらばらなので, 教師が書く順番に色を変えたり, 文字スライドを活用したりすることを通して, 定着させていきたい。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III課程	授業提供者	永留梨香
教科・指導の形態	算数・4年1組	単元(題材)名	お金

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 数概念の児童の実態, 買物の経験について ・ お金の単元の指導計画について ・ 本時の展開の内容について
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<p>(1) 硬貨の弁別の活動の様子について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の活動の評価, 自己評価 ・ 弁別に取り組む順番 <p>(2) 硬貨の価値の理解について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まだ難しい段階ではあるが, 教師が硬貨の価値を意識して提示する工夫が必要 <p>(3) お金のマッチングカードゲームでの手立てについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ カードの絵と実物の硬貨とのマッチング <p>(4) 課題が終わった時の報告の仕方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童から「終わりました」と伝えられるようにしていくことが必要
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<p>(1) B児を先に取り組ませて, その様子をA児が見ることでA児もやり方を理解し, 自信をもって取り組めるようにした。 教師が先に間違いを指摘するのではなく, 児童が自分の間違いに気付けるように言葉掛けを工夫するようにした。</p> <p>(2) 板書を下から10円→50円→100円→500円とし, 硬貨の価値を教師が意識して提示するようにした。</p> <p>(3) マッチングカードゲームで引いたカードの硬貨がどれになるか, 実物の硬貨を見せて選ばせ「〇円」と硬貨の名前を言うようにした。</p> <p>(4) 課題が終わった時に「終わりました」と言えるようにした。</p>
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 授業の流れをパターン化して繰り返し, 少しずつ課題を変えながら進めることで児童も安心して学習に取り組むことができた。</p> <p>◎ 児童が興味のあるマッチングカードゲームにお金の要素を入れることで, 飽きることなく楽しんで学習することができた。</p> <p>◎ 弁別やマッチングカードゲームを繰り返していく中で, 「10円」「100円」と児童が言えるようになってきている。</p> <p>△ お金の価値の理解, 算数と生活単元学習との関連など考えていく必要がある。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III課程	授業提供者	中村かおり
教科・指導の形態	算数	単元(題材)名	お金

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ 数概念の児童の実態について (数詞はできるようになってきているが, 数量の概念が難しい。)
- ・ 今までの算数の活動の様子
- ・ 展開の内容について (なぜ, 1円玉からの指導から行うのか。3種類の硬貨の意図は。)
- ・ 今後の展開について (100円玉, 10円玉の数え方や1円, 2円・・・10円まで教えるのか。)

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- (1) 3種類の硬貨についての弁別の仕方
(ばらばらに置くよりも並べて置くほうがよいのではないか。)
- (2) 目標について
- (3) 子供の動きや様子について (よかった点, 改善点)
- (4) 学習環境について (隣の子供の様子が気になっていたので, 机を離して集中できるような設定がよい。)
- (5) 今後の展開の仕方について (実物を使って取り出す活動を入れたらよいのでは。)

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- (1) 事前にいろんなパターンで弁別を設定していた。(ばらばら, 縦, 横)
- (2) 提供授業のときは, 弁別と数える比率が5分5分だったのだが, 今後弁別が間違わないようになってきているので数える時間を増やした。現在, 4:6の割合で活動を展開している。
- (3) 気になる様子を見せているときは, 少し机を離したり, 友達が答えているときには, 話を聞くように指導したりしている。
- (4) 半具体物ができるようになったら実物を使用しようと思うが, まだあいまいなところがあるので半具体物で継続して指導中である。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)

- ◎ 子どもの実態に合っていることが, 周りの意見からも出されていたので継続して指導ができた。子供たちも3までの数量が少しずつ分かってきたように感じる。日常生活の場面でも1, 2, 3と数える様子が見られている。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	小学部 III課程	授業提供者	實島あやの
教科・指導の形態	日生	単元(題材)名	朝の準備

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- 棚の整理(鞆を置く場所, 教科書・本の場所, 予備の洋服置き場, 毎日の着替える洋服)
- 一つ一つの活動の始まりと終わりをしっかりと意識できる言葉掛けをする。(大きさにもっとメリハリ)
- 場所の明確化が大切(場所一すること)
- 細分化した行動パターンが意識されているか
- 実態把握ができていないか(教師が全ての援助をしなくて可能か, どれくらいの援助が必要かなど)

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- 着替えの際, 教師と同じ目線の高さになると思うのでベンチや椅子などにかけてみてはどうか。
- 着替え中棚の中のおもちゃに目がいき, 気が散ってしまうことがあったのでカーテン等で隠すとよいのでは。
- ボタンの穴, ボタンが大きくなったらできるのか。
- 台ふきを洗う際, 水道を出したままだと難しいので, 洗面器等に水を溜めて洗うと分かりやすいのでは。
- 教師の言葉掛けや指さしに応じて机を拭くことができているので, 隅々まできれいに拭く, 拭く方向を決める, 机にシールを貼る等してワンステップ上ができそう。
- 脱いだ制服を自分で拾って籠に入れていたので, 脱いだ物を置く場所を指定(籠)したらできるのではないか。
- 教師が体操服の裾をたぐり寄せて児童に渡すようにすると着間違いを防げるのでは。
- ハンガーを提示する位置は子どもの正面がよいのでは。将来一人でかけることができる練習にもつながる。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ズボンは履きやすい生地のズボンを使って練習する。
- 着替えの際に児童の姿勢保持用の椅子を利用する。
- 棚は布で目隠しをする。
- 着替える際に, 着替えのみでなく, 籠に着替え・鞆を入れて更衣スペースへ行く。
- 制服のボタンを児童がつまめる大きさのボタンにする。
- 係の仕事(台ふき)を洗う際に, バケツを利用して水を貯めて洗う。
- 蛇口を自分で閉めることができるようにレバー式にする。
- 台ふきで机の隅々まで拭くことが出来るように, 机にシールを貼って目印を付ける。
- 脱いだ衣類を入れる籠とシューズを脱いだ後に入れる籠を用意する。
- 体操服は裾をまくり上げて児童に渡す。
- ハンガー掛けにはハンガーと同じ色のシールを貼り, 掛ける場所が分かりやすいようにする。

4 授業改善の成果や児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 姿勢保持用の椅子を使うことで, 児童の大きな動きが減り, 次の行動への動きがスムーズになった。
- ◎ 籠を持って着替えスペースに行くことによって, 余計な動きが軽減された。
(前: 机→更衣→机(鞆を取る)→棚 今: 机→更衣→棚)
- ◎ ボタン穴とボタンを大きくすることで自分でボタンを探す仕草が見られ, 今ではボタン穴に半分まで入れたボタンを人差し指と親指でつまんでボタンを閉めることができるようになった。
- ◎ 係の仕事をする際, バケツを使うことで係の仕事に必要な道具としてわかり, 自分で着替えが終わったら準備するようになった。
- △ 机の目印シールは他の児童が気になってしまい授業に集中できなかった。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	若松千代
教科・指導の形態	生活単元学習	単元(題材)名	「お楽しみ会をしよう」 「みんなで芋掘りをしよう みんなで焼き芋をしよう」

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿、支援計画、指導計画の重点目標、授業づくりの視点、教材・教具、導入や指導過程工夫等について)

7月「お楽しみ会をしよう」(1年生合同学習)

- ・ お楽しみ会の事前学習なので、お楽しみ会への期待感を高め、見通し(お楽しみ会で何をするのか)をもってほしい。
- ・ 実態差は大きいですが、みんなで役割分担をして学習計画表を作る。「みんなで～する」という態度を伸ばすため、受動的になりがちな事前学習を能動的にするため)
- ・ 5月実施のお楽しみ会は、レクリエーションや調理のメニューの内容を教師が決めていたが、今回は、生徒が選択して決める場面を設定する。

11月「みんなで芋掘りをしよう みんなで焼き芋をしよう」(1年生合同学習)

- ・ 芋掘りの振り返りの学習である。これまでの振り返りの学習は、写真を見てワークシートに感想をまとめることが多かったが、今回は、掘ったサツマイモ、つまり、実物を用いた振り返りも取り入れる。
- ・ 学習目標を「みんなで芋掘りをしたことを振り返ろう」としたが、具体的な学習内容が見えない。そこで、学習内容、つまり、どのように振り返っていくのかを示すようにする。
- ・ 生徒たち一人一人が身に付けている表現方法(文、文字、絵、身振りなど)で感想を表す姿を引き出すために、個に応じたワークシートを用いる。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

7月「お楽しみ会をしよう」(1年生合同学習)

- ・ 学習計画表を役割分担して作る学習活動では、進んで取り組む姿や出来上がった計画表を満足気に教師に見せる姿が見られた。また、お楽しみ会への意欲付けにもなった。
- ・ レクリエーションの内容をみんなで話し合っ決めて決める学習活動の際に、今までやったことのある遊びの写真やイラストをまとめた大きな紙を用いたことは、生徒が意思表示する手助けとなり、効果的であった。話し合いが教師主導になっていたので、①生徒同士で話し合いを進めることができるようにしたい。また、今回じゃんけんで勝った生徒の希望が通ったが、もっと、他の生徒の希望も反映できるように工夫していきたい。

11月「みんなで芋掘りをしよう みんなで焼き芋をしよう」(1年生合同学習)

- ・ 学習活動(どのように振り返るのか)を番号・文字・絵で示したことは、生徒たちが見通しをもつ上で効果的であった。
- ・ 実物を用いること(掘ったサツマイモを見る、触る、数えるなど)で、実感を伴う振り返りをすることができた。
→サツマイモを入れた箱を持ち上げて重さを実感するなど、他にも方法は考えられる。
- ・ 生徒たちは、芋掘りの写真とVTRをととも集中して見ていた。今回、教師はあえて発問を控えてその様子を見守ったが、②生徒とやり取りをして言葉を引き出していくようにした方が、「見る」活動がより充実し、その後の活動にもつながったのではないだろうか。
- ・ ③経験したことの感想をワークシートにまとめる学習活動を積み重ねることで、生徒たちは、自らの表現方法を獲得していけるのではないだろうか。

3 2を受けて、授業改善に取り組んだ点

- ・ 2-①を含め、生徒同士の関わり(話し合う、助け合う、声を掛け合うなど)を増やしたいと考え、11月「みんなで芋掘りをしよう みんなで焼き芋をしよう」では、生徒同士が協力する姿を引き出すために、学習活動の設定やグループ分け、教師の関わり方を工夫した。
- ・ 2-②を受けて、焼き芋を振り返る学習の際は、生徒たちと言葉のやり取りをしながら写真を見ていくようにした。
- ・ 2-③を受けて、今後も、行事や体験活動を含む学習活動の後には、自分がしたこと・できたこと・がんばったことなどを振り返る学習に継続して取り組み、達成感や自信を得たり、学習内容を定着させたりすることができるようにしていきたい。また、生徒一人一人に合った振り返りの仕方や振り返りの視点を検討していきたい。

4 授業改善の成果と課題、児童生徒の変容について(成果…◎、課題…△)

- ◎ 生徒たちの中で「みんなで協力して～する」という態度が身に付いてきた。
- ◎ 事前学習で意欲と見通しをもつ、体験活動の場で自ら進んで取り組む、事後学習で経験したことを思い出して自分なりの方法で感想をまとめるという一連の学習方法が定着しつつある。
- △ 集団の中で多くの友達と関わりながら大きな物事に取り組むことができるという点が、合同生活単元学習の良さの一つである。合同生単の良さを生かしながら、幅広い実態の生徒たち一人一人に応じた学習活動を展開していくことが今後の課題である。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	小薄 朝美
教科・指導の形態	生活単元学習	単元(題材)名	職場体験をしよう

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿、支援計画、指導計画の重点目標、授業づくりの視点、教材・教具、導入や指導過程工夫等について)

- ・ 生徒たちが何をするのかしっかり見通しをもち、意欲的に本番の活動に取り組めるような授業づくりをしていきたい。
- ・ 昨年度の卒業生にインタビューをし、職場体験の感想や気を付けることなど「先輩の生の声」を伝えるようにする。→生徒の心に残るのでは。
- ・ 職場体験で「どのような仕事をするのか」が子どもたちの一番気になる部分だと思われる。子どもたちの意欲につながるよう仕事内容は写真等を利用して具体的に伝えるようにしたほうがよい。
- ・ 生徒Yについて・・・じっと椅子に座って話を聞いているのはやや苦手である。→ホワイトボードに張りものをする、スイッチ操作を任せるなど生徒Yの活動を取り入れることで落ち着いて参加できるようにする。(張りものを依頼する際は、数字を手がかりに生徒Yが張りものができるようにする。その他の生徒たちにも有効である。)見通しをもって授業に参加できるように授業の流れを用意する。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 実態に幅がある学習集団の授業について 授業中「待つ」ことが度々見られた。
 - 生徒Kと生徒S→生徒Tと生徒Yが広幅用紙に写真等を貼っている際、待つ時間が多かった。
 - 生徒Tと生徒Y→教師が説明をしている間、内容が難しく(KとS向け)、待つ時間が多かった。
- 生徒Tと生徒Yが広幅用紙に写真を貼っている時間に、生徒Kと生徒Sは冊子に自分なりのまとめをするようにすれば時間も有効に使い、内容も深まるのでは？
 - 生徒に応じた内容を+αで準備していたら「待つ時間」が解消されると思われる。
- ② 教材・教具について
 - ・ 身近にいる先輩へのインタビューがよかった。進路をより近いものとして捉えることにつながっていると思う。視覚的に分かりやすく、訴える力がある生の教材が効果的である。

3 2を受けて、授業改善に取り組んだ点

- ① 授業中「待つ」ことが度々見られることについて
 - ・ 生徒の実態に応じてワークシートの形式を2種類用意してまとめを行った。
 - KとS→頑張ったこと、失敗したこと、褒められたこと、職場体験をふりかえりこれから頑張りたいことなど自分の気持ちや考えを文章で具体的に書く形式。
 - TとY→写真等を貼り、教師と一緒に簡単な文章で振り返る形式。
- ② 教材・教具について
 - ・ 職場体験の様子をVTRや写真で振り返りながら、クラスみんなに言葉や実演で発表することは、視覚的に分かりやすく、「発表する」「友達の話をしっかり聞く」という学習が達成できた。中学部全体の報告会でも、写真や実演は伝える力があり分かりやすいものとなった。

4 授業改善の成果と課題、児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 生徒の実態に応じて学習のまとめ方を変えて取り組んだことで、職場体験の振り返りに深みをもたせることができた。
- ◎ 生徒によって「文章でまとめる」、「がんばった様子の写真を選んでまとめる」としたことで、生徒それぞれが考えたり、自己評価をしたりすることができた。
- ◎ 「言葉遣い」に気を付けること、学校・学園・家庭生活でできることについて考えたり、意識したりすることができ、がんばることとして目標をたてることができた。
- △ 生徒それぞれの「待つ」時間がなるべくなくなるように作ったワークシートであつが、考える内容を深めたことで、字を書くスピードや考えをまとめる力などにも個人差があり、結果的に「待つ」時間ができてしまった。「待つ」時間については、ある程度、個に応じた時間などを予測しておき、その場面による臨機応変な対応も必要であると感じた。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	五反田真希
教科・指導の形態	国語	単元(題材)名	童話・物語

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ 生徒が主体的, 意欲的に学習に取り組める活動内容について。
- ・ 個人目標を達成させるための, 個々に応じた支援方法について。
- ・ 一斉指導では集中が途切れがちな生徒に対して, 注意の持続を図れるような工夫について。
- ・ 自信をもって発表できるようにするための支援方法について。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

Mさんへの支援について

- ・ 自主性を促すために, 発問の後に少し待つ時間をおいて挙手することを待ったのがよかった。
- ・ ワークシート記入の際に個別に賞賛をして自信につなげたので, 自信をもって発表することができていた。
- ・ よかった点を具体的に言葉でフィードバックしたことが意欲につながっていた。

Hさんへの支援について

- ・ 友達の発表中は集中が途切れてしまいがちな点に対して, 事前に「友達の発表について感想を聞くよ」と予告していたことがよかった。
- ・ 名前を呼んでから説明をしたり, 「今は聞いてください」「鉛筆は置いてください」とその都度指示したりすることで, 今何をすべきか理解できて集中していた。

改善事項

- ・ ワークシートのマス目が小さくて書きづらそうな生徒がいた。
- ・ 説明の際に用いられている単語の意味(登場人物になりきる)が分かっていない生徒がいた。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ・ ワークシートのマス目を大きくして, 余裕をもって書けるようにした。また, 枠の大きさに合わせて文字の大きさを調節できる生徒についてはそのままにした。
- ・ 説明の後に意味が理解できているか確認をした。「○○とはどういう意味かな」と問いかけて, 簡単な言葉で補足したり, 具体例を示したりした。

4 授業改善の成果や児童生徒の変容について

- ・ 授業の流れをパターン化したり, 毎回流れを板書したりすることで, 見通しをもって落ち着いて取り組めるようになった。授業の最後に毎回漢字の小テストを行っているが, それも定着してきており, 自ら予習をして小テストに臨む姿も見られるようになった。

Mさん

- ・ 徐々に自分から挙手をして発表するようになってきている。自信がないときには, 正解の頭文字だけをヒントに出したり, 想起できるような動作を見せたりすることで, 発言の回数が増えてきている。

Hさん

- ・ 友達との相互評価を取り入れるようになったことで, 友達の発表にも集中できるようになってきている。また, 友達のよい面を見付けようとする姿勢も感じられるようになってきている。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	小倉寿彦
教科・指導の形態	数学	単元(題材)名	時刻と時間

<p>1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿、支援計画、指導計画の重点目標、授業づくりの視点、教材・教具、導入や指導過程工夫等について)</p> <p>○ 生徒が主体的意欲的に取り組める授業づくり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 積極的に挙手して発表する。 ・ 自分の考えや意見をみんなに説明する。 <p>○ 個人目標達成に対する教師の支援の在り方</p>
<p>2 授業提供後の検討会で話し合ったこと</p> <p>○ もっと教師が説明する(しゃべる)場面を減らし、生徒が主体的に活動する場面を作れないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の流れに見通しをもつことで、自主的に行動できるようになるのではないか。 ・ 一斉授業とグループでの活動、個別の活動の場面を目的に合わせて作ることで、自分で考えたり、お互いの意見を出し合ったりできるのではないか。 <p>○ 大事なところが残るような板書の工夫ができないか。</p>
<p>3 2を受けて、授業改善に取り組んだ点</p> <p>○ 授業の流れをパターン化し、生徒が自分たちで課題に取り組めるようにする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 導入の一斉授業で本時の目標や課題について考えさせ、解き方(解決法)を発表させる。 ② その後、個別のプリントに取り組みせ、それぞれで活動する。 ③ 最後に全体で、お互いの意見や解答を発表して確認し、本時のまとめする。 <p>生徒が課題について自分たちで考える場面や全体に発表する場面を必ず作るようにして、学習の流れを習慣化することができた。</p> <p>○ 練習問題には、小黒板を使い、めあてや大事なポイント、まとめは大黒板に残るように板書するように改善した。</p>
<p>4 授業改善の成果や児童生徒の変容について</p> <p>○ 発表する機会を意図的に増やしたことで、発表することに慣れて自信をもち、積極的に挙手し、自分の意見や解答を言えるようになった。</p> <p>○ 授業の流れに見通しをもたせることで、自分たちで次の課題に取り組むようになった。</p> <p>○ 小黒板を使うことで、大事な学習内容が大黒板に残り、本時の流れを振り返りながら、まとめをすることができるようになった。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	板敷 大和
教科・指導の形態	日常生活の指導・学級	単元(題材)名	朝の会

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ お互いの朝の会・帰りの会を見ることで, 有効な手立てや教材教具開発のヒントになるということ。
- ・ 日課として取り扱うので, 定着が図りやすく, 学級としての時間に余裕が出てくるということ。
- ・ 一つの活動を繰り返すことで, 生徒が自信をもって取り組むことができるということ。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ・ 支援を少なくしていくことを考える。
- ・ T・Tの観点から, 生徒への支援の必要性を考える。
- ・ 日直の立ち位置…会順表を覗き込んでいた。「先生の話」では, 席に着かせる。
- ・ 朝の会が終わってからの時間の使い方…余暇に繋がる時間にしてもよい?

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ・ 中学部棟の前で生徒を出迎えることで, 一人でバス下車や教室までの移動ができる環境を作った。(賞賛を受けることのできる場面を多くした)
- ・ 生徒の実態に応じて, ホワイトボードに掲示してあった手順カードの枚数を減らした。
- ・ 朝の準備が終わったときに「できました。」や「終わりました」と報告することをルール化した。
- ・ 会順プレートをホワイトボードのすぐ前に置くことをルール化することで, 司会の立ち位置が横になり, 文字を自然な姿勢で読むことができるようにした。
- ・ 朝の会「先生の話」で司会の生徒は, 一度席に着くことをルール化した。
- ・ 朝の準備, 朝の会が早く終わったときには, 生徒の好きなCDを聞く時間を設定した。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)

- ◎ バスを降りない, 教室の前で立ち止まるといった「行動上の問題」が見られなくなった。
- ◎ 自分から元気よく挨拶をしたり, 報告をしたりすることができるようになった。
- ◎ 生徒同士で賞賛し合ったり, 気付いたことを指摘したりするようになった。
- ◎ めくり式会順表の置く位置をホワイトボードのすぐ前にする, 「先生の話」は自分の席に着いて聞くというルール化が全生徒, すぐに身に付けることができた。
- △ 日々繰り返す内容であるため, ルール化するだけで生徒がすぐに身に付けることができる内容(行動)がある。教師の主観による指導内容・方法になる危険性がある。常にチームで指導に当たる重要さをさらに実感することができた。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	墓本 武志
教科・指導の形態	日常生活の指導	単元(題材)名	朝の会

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ 他の学級の日生(朝・帰りの会)の内容と教師の教材・教具, 場に応じたこれまでの支援などについて話し合うことで, 互いに類似した状況から指導・支援に繋がりやすいということ。
- ・ 初めは, 会順表を準備して会の進行に慣れさせ, 徐々に会順表を簡潔にしていくことで, 少しずつではあるが表を見なくても進行することができるよう, 個に応じた繰り返しの必要性について。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ・ 繰り返しの行うことで, 進行する生徒もスムーズに会をすすめることができる。また, 教室環境の雰囲気から, 他の生徒も活動における要求内容を身に付けることができるのではないかな。
- ・ コミュニケーション能力の向上のために, カード等が必要な生徒においては使用をやむを得ない。
- ・ 個の実態にもよる。教師側からきっかけとして言葉掛けをしてさせるのは, 指導観にもよるのではないかな。
- ・ 今月の目標(全体)を確認したり, 単元に沿った目標の提示をしたり, 日課以外の個の目標を確認してみてもいいのでは。
- ・ なるべく教師側からの支援を少なくし, 生徒だけで会が進めていくことができるようにしていく。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ・ 個に応じて今何をしなければならぬのか(挨拶や空いた時間の活用)について, モデリングをしたり, 周りを見て動いたりするように言葉掛けをした。もちろん, 生徒主体のため最小限の配慮を行うよう心がけた。
- ・ 個によって, 会に要する時間が違うため, 本人に言うのではなく周りに時間を意識させるよう検温や朝の学習の範囲(量)などに取り組ませた。
- ・ 時間割表を確認しながら, 一人ひとりの時間における動きを確認することで, 1日の見通しをもたせ, 「〇〇の時間に〇〇を頑張る」というような目標を引き出すようにした。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 自分から進んで挨拶をしたり, 報告や連絡をしたりするようになった。
- ◎ 他生徒の検温時には自分が何をすべきかを考え, 空いた時間をそれぞれが考えて動くようになった。
- ◎ 登校時, 時間割表を見て本時の日課を確認するようになった。その中でも〇時間目の学習内容を聞いて目標を口に出す生徒も出てきた。(保健体育や国語, 数学など)
- △ 機械的に会を進めて行く場面が見られることがある。教師側の会順表(支援)が果たして効果的なのか, 主体的といえるのかが課題である。ある程度の決まりや基準性は必要ではあるが, 掲示物などによる, また固定概念による指導は個性の主張に反する部分が大きかったりするのかもしれない。

提供授業のまとめ

対象生徒	中学部 III課程	授業提供者	田浦 清美
教科・指導の形態	日常生活の指導（自立活動との関連）	単元（題材）名	朝の会

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 始め・終わりのあいさつや歌のときに教師自らが率先して声を出したら, 子どもたちも声を出すのではないか。 ・ 教師の言葉掛けを減らすにはどうしたらよいか。
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日直の声が小さくて聞き取りづらかった。その対策として, 教師が後からもう一度言うことも考えられるが, 本児の成長の様子と 周りの子どもたちの耳を澄ませて聞こうとする態度を考えると, 繰り返すことはしなくてよいかも知れない。 ・ 日直が話しているときに他の子どもへの指導があったので, 指導した方がよいこと, 「今」でなくてもよいことを見極める必要がある。 ・ 模型時計と壁の時計の理解がどれほどできているか分からないが, 模型時計と時計を見比べて 帰りの会の開始予定時刻を過ぎたことに何となく気付くぐらいで今はよい。 ・ 進行表の前に日直が立ってしまったため, 見づらかったので気を付けたい。 ・ 「帰りの歌」はCDを利用する方法もあるが, 提供授業のときは, 日直がアカペラを選択した。 ・ 「明日の時間割」があると分かりやすい。 ・ 日直の「今日の反省」を全体に還すことが不十分なので, 続けていきたい。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<p>(1) 日直の立ち位置 日直が進行表の前に立ったときに右か左かに寄ってもらった。(1度そういうことがあった) その後は, 黒板消し係が掲示する場所を選んでいる。</p> <p>(2) 聞こえる声 いろいろな場面で今まで以上に「相手に聞こえる声で相手に分かりやすく」話すことを「聞こえる声」を求めるようにしている。</p> <p>(3) 指導のタイミング その場での指導が必要と判断したときも, 可能な限り声は出さず合図をするようにしている。</p>
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 進行表を黒板に貼る係が, 真ん中を避けてはるようになった。</p> <p>◎ いろいろな場面で, 今まで以上に「適度な声」を求めて繰り返し練習をしている。生徒自身も心がけつつある。</p> <p>△ 「その場」がベター, と思われるときは注意しているが, 果たしてその判断が正しいのか分からない。</p> <p>△ 日直の「今日の反省」を受けての教師の話がまだまだ不十分。全員に還る話をしたい。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	二禮木 智香
教科・指導の形態	自立活動・個別指導	単元(題材)名	身体の動き

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- 授業づくりの視点
 - ・ 1対1の授業なので, まずは本生徒が楽しい時間の中で取り組める雰囲気作りが大切だ。
 - ・ 本生徒が必要としている力とは? 保護者の思い
- 本生徒の将来身につけさせたい力は
 - ・ 本生徒はスリスリしたり, 物を左右に振ることは好きだが, 自ら握力を使うことやひねる活動, 指先それぞれの独立がまだ未分化だったり, 発達途中にある。日常生活に必要な手を使った行動を取り上げ, 将来的に飲みたい水筒をひねったり, ペットボトルのふたを開けて飲むことができたり, ドアノブをひねってドアの開閉ができるようになりたいということを話し合った。
- 本生徒の手指の活用はどの程度か
 - ・ 本生徒の手についての行動を観察したり, 発達検査などの項目を参考に発達段階を把握したりしようということになった。
- どのような活動が有効か
 - ・ 教師は自分達が意識して手指の発達だけを着目して考えることがなかったので, ひねる行動に至るまでにどんな力が必要かを話し合った。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 教師との様子
 - ・ 担任との関係もとれていたので, 楽しい雰囲気の中で活動できていた。
- ② 楽しみの中に, 意図的なねらう動作が入れられたか
 - ・ 新聞紙を車のハンドルの形にして握らせ, ハンドルをしっかりつかませて動かす活動は, あまり興味をもてていなかった。素材がかたかったかもしれない。
 - ・ 水筒に水を入れ重さをつけて, 端と端を教師と本生徒でもって手首のひねりの感覚をやる活動は, 自然なひねりの動きを行っていた。継続する方向で。
- ③ 今後に向けて
 - ・ 目指すところは日常生活に必要な手の力なので, 自立活動の時間だけでなく, 日々の活動の中で教師が意識して毎日行うことが本生徒の力になっていく。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ① 教師との様子
 - ・ 体調によっては活動内容を少し少なくすることや, 出来るときにはたくさんの活動を入れながら授業をすることができている。
- ② 楽しみの中に, 意図的にねらう動作が入れられたか
 - ・ 2でよかったとあった活動は継続して行っている。
- ③ 今後に向けて
 - ・ 教室のドアやトイレのドアなど開閉の際は積極的に自分で手を使ってあけるよう促している。

4 授業改善の成果や児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)

- ◎ 手の力や発達について, チームの先生方といろいろと語りあえたことで, 教師自身が意識して手の活動を取り入れた授業内容を工夫しようとすることができた。またペア同士で共通理解しながら日々の中で必ず自分で手をつかって行うことを続けることで, トイレのドアの鍵を自分で開けることができるようになった。(ドアがあかない→ドアの鍵をあければよい, というシステムも理解し言葉かけなしでも出るときは自然とできるようになった)
- △ 手の発達という部分での知識が少なかったのでアプローチとしてスマートではない部分も多くあったと思う。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	中学部 III課程	授業提供者	野口 剛
教科・指導の形態	自立活動	単元(題材)名	心理的な安定・ コミュニケーション

<p>1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)</p> <p>○ 指導計画の重点目標について</p> <ul style="list-style-type: none"> PECS (絵カード交換式コミュニケーションシステム) を活用して要求や感情を相手に伝えることをこれまで行ってきたが,今年度はVOCA (音声出力型コミュニケーション装置) も活用していく。 <p>○ T1 と T2 の役割の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習場面において T1 は,学習を進める。T2 は,生徒の側に座りコミュニケーション支援を行う。 <p>○ 個人目標の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態として教師の目を直視することは,まだ難しいので,教師の方に目を向けることに変更する。 <p>○ 学習内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> 現在,生徒が興味関心のあるものを取り入れる。(ひも通し,ドミノ,黒ひげ危機一髪,吊り遊具など) <p>○ 指導の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> すべてを教師が決めるのではなく,生徒にも時々課題の選択や順番を決めさせる。 生徒の要求を引き出すために学習場면을工夫する。 相手を意識した遊びや学習の場の設定を設定する。
<p>2 授業提供後の検討会で話し合ったこと</p> <p>① T1 と T2 の役割について</p> <ul style="list-style-type: none"> 何かが足りない状況を設定し実施したが検討が必要。T1 と T2 の役割を分担したが,T2 の生徒に対する言葉掛けやサインを促す支援が少なかった。指示は T1 のみでよい。T2 も時々,指示をしていることがあったので,役割として生徒に寄り添い,言葉を引き出す支援をする。 <p>② 相手を意識した遊びや学習の場の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> 普段,一人で遊ぶことが多いので意図的に相手がいる遊びを取り入れる。よくする黒ひげ危機一髪は順番が分かり,相手へのお願いの仕方ができていた。今後も遊び等を通して相手を意識することができる学習をしていく。 <p>③ 今後の重点目標について</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解している言葉は多い。しかし,気持ちをうまく相手に伝えることができずに自傷行為や他傷行為につながることもある。自分の感情や気持ちをさらに相手に絵カードやVOCA で伝えられるようにしていきたい。
<p>3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点</p> <p>① T1 と T2 の役割について</p> <ul style="list-style-type: none"> T1 と T2 の役割分担を明確にし,T2 は,生徒の行動や表情を見ながら,生徒の内言語へのアプローチをしていく。 <p>② 相手を意識した遊びや学習の場の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> トランプやカルタなど一人でもできるが,相手がいる遊びを取り入れる。順番を守る。自分の順番までは待つ。人の物には触らないなど遊びのルールも学ばせる。教師は常に生徒のモデルとなる。 <p>③ 今後の重点目標について</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習や振り返りの中で,絵カード,VOCA を活用する場面を多く設定する。
<p>4 授業改善の成果や児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)</p> <p>◎ TT の役割を明確にすることで,生徒が担任以外の教師にもお願いや要求をスムーズに行うことができるようになってきた。生徒にとっても「誰にどのようにお願いすればよいのか。」が理解できたようである。</p> <p>△ 生徒の内言語へのアプローチをしていく中で,生徒理解が深まったように思う。まだまだ,十分な支援が行えてはいないが,少しずつ生徒の感情や気持ちを教師が理解することができるようになってきた。</p> <p>◎ VOCA は,コミュニケーションツールとして効果的である。音声で伝えたり聞いたりして学ぶ機会が増えたことで,生徒の言葉や単語に対する反応が早くなってきたように思う。</p> <p>◎ いろいろな遊びを経験・体験していくことで遊びのルールを学び,相手を意識することもできてきた。自分でやりたい遊びでも次の人に渡したり順番を守ったりすることもできつつある。</p> <p>◎ スケジュール表の提示でやるのが分かり,落ち着いて授業に参加できることが多くなった。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高学部 III課程	授業提供者	有満勝利・前田みゆき
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	時間と時刻

<p>1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の1日のスケジュールを円グラフに表すとき, 色分けした方が見やすいのではないか。 ・ 円グラフの大きさ。 <ul style="list-style-type: none"> → 活動スペースと大きさが合うか。 ・ 8人を2グループ程に分けたとき, <ul style="list-style-type: none"> → ①各班でひとつ作る。②一人一人個人で作る。
<p>2 授業提供後の検討会で話し合ったこと</p> <p>① 生徒の実態の捉え方と教科のねらいについて</p> <ul style="list-style-type: none"> → 「実務」の内容を既に理解している生徒に対し, 教育課程どおりに進めるのか。進める場合は内容をどのように発展させていくか, 検討が必要。 → 「実務」で学んだことを実生活に生かせることが大事。 <p>② グループ学習の意図は何だったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> → グループ内での話し合いが活発になるような言葉掛けが必要。 <p>③ 評価項目にある「わかる」「気づく」という項目は評価しにくいのでは。</p> <ul style="list-style-type: none"> → 発言しない生徒への評価, 指導・支援についても考えることが必要。
<p>3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点</p> <p>① 「実務」の内容をより深く取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 例えば, 時間と時刻では速さの分野, 金銭では割合の分野に取り組む。 <p>② グループ内での意見が出やすいような取り組み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「どうしたらいいと思う?」などのような問いかける言葉掛けにより, 生徒たち同士で考えるようにした。 ・ グループ活動に慣れるように, 活動回数を増やすようにした。 <p>③ 評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価しやすい目標設定に取り組んでいる。
<p>4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)</p> <p>◎ グループ活動の際に, 言葉掛けを受けて主体的に取り組むようになりつつある。</p> <p>△ 特定のメンバーだと話し合いも活発に行われるが, 異なるメンバーになるとあまり進まないこともあった。</p> <p>◎ グループ学習の回数を重ねる毎に雰囲気慣れつつある。</p> <p>△ 応用問題に取り組むことで, 実態により理解度に差が出てきている。</p> <p>◎ 応用問題に取り組むことで, 実態により意欲が増す。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	春口陵二・前原修一
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	金銭【実務：高等部1段階(4)】

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿、支援計画、指導計画の重点目標、授業づくりの視点、教材・教具、導入や指導過程工夫等について)

- ・ 生徒の実態に応じた、高等部段階における実務分野(金銭)の学習指導計画について
- ・ 金銭の指導にあたり、日常生活へ生かすことのできる指導計画について
 - 一般化することができる内容であるか。(高等部段階では一般化しやすいことが最も大切である。)
- ・ 数学的活動(チラシの活用)を実践する際に言語活動をいかに充実させるかについて
 - 生徒のグルーピングのあり方(どのくらい的人数が適正なのか)はどうあればいいか。
 - 発表・話し合いの場の設定はどうあればいいか。
- ・ 生徒が学習に必然性を感じることでできる導入のあり方について
 - 学習のめあてを主体的に思いつづることができる金銭使用の場面設定はどうあればいいか。
 - 具体物(チラシ・本物の金銭・レシートなど)を用いることにより意欲喚起や一般化はどうあればいいか。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 言語活動のあり方について
 - 小グループ(2~3人)でよいのか。
 - 個別での学習活動とのバランスはどうであったか。
 - 実態的に個別の学習を多く取り、気づきを発表させる形式の言語活動も良いのではないか。
- ② ねらいを絞り込んだ授業展開について
 - チラシを使った効果的な消費活動を指導する際は、ポイントをしばった指導が必要。
- ③ 板書の構成について
 - 生徒にとって分かりやすい内容であったか。
- ④ 学習計画について
 - 高等部の実務分野における指導計画として一般化がしやすく指導内容として適当であったか。

3 2を受けて、授業改善に取り組んだ点

- ① 言語活動のあり方についての再検討
 - 可能な場合は個別での気づきを優先させ、それぞれの発見を共有する形での言語活動の採用。
- ② ねらいを絞り込んだ授業展開
 - チラシから見る情報を意図的に制限することで分かりやすくした。
- ③ 板書のさらなる簡素化による情報の構造化
 - 「めあて・課題提示・発見の共有・まとめ」と提示情報を少なくした。
- ④ 学習計画の再構築
 - 次年度以降の数学・実務分野において同内容で指導する際の指導計画を再構築した。

4 授業改善の成果と課題、児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ チラシから必要な情報を取り出すことができるようになった。
(値段・産地・値引き額・購入可能数 他)
- ◎ 計算機の取り扱いがうまくなった。(合計金額の算出、おつりの計算など)
- ◎ 現在ある四則演算の概念を金銭の計算において活用することができた。
- ◎ レシートを基にした金銭管理の方法について知ることができた。
- △ 金銭管理を一般化するには至っていない。(おこづかい帳の習慣化ができていない。)

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	竹崎浩記 ・ 折田美紀子
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	金銭

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
○ 設定金額について <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の設定金額はどうか? <ul style="list-style-type: none"> → 800円という設定金額になっているが, 実際の買い物の場面では千円札での買い物が多いのではないかと「1000円」で買える物, 買えない物という学習を前時までに行い, その実態を見た上で金額を決定する。
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
① 板書について <ul style="list-style-type: none"> ・ 「めあて」, 「まとめ」をしっかりと書くことで, 本時の授業の展開を視覚的に訴えることができるので, 板書の構造化を目指したい。 ・ 板書をワークシートと同じ様式になるようにしてみようか? ② 本時のめあての設定について <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の授業で生徒が目指す活動が「めあて」として提示されていたか? ③ 生徒の実態差について <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態差が大きく, 課題が早く終わってしまう生徒や, なかなか計算が終わらない生徒がいた。課題が早く終わった生徒には発展的な課題を用意したり, 計算が難しい生徒には関数計算機を用意して式が見えるようにしたりする等の手立てを行い, 待つ時間がないようにしていきたい。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
① 板書について <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の「めあて」と「まとめ」をきちんと板書して生徒のワークシートにも記入できるようにし, 本時の流れを生徒に視覚情報として提示し, 本時の学習を振り返ることができるようにした。 ・ ワークシートと板書を同じ様式にし, 生徒がワークシートに記入したものを板書で確認できるようにした。 ② 本時のめあての設定について <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の目指す本時の活動を分かりやすい言葉で「めあて」として提示し, 生徒自身にも記入させるようにした。 ③ 生徒の実態差について <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題が早く終わると予想される生徒に関しては, 発展的な課題を用意し, 待つ時間がなくなるようにした。課題が進まない生徒には, 教師が個別に対応するようにしている。
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
◎ ワークシートと板書を同じ様式にしたことで, 今どこを見れば良いかが明確になり, 生徒のワークシートへの記入が早くなった。 ◎ 本時の「めあて」「まとめ」を板書し, 1時間内で本時の内容をいつでも振り返ることができるようにしたことで, 生徒の理解が深まっている。 ◎ 課題を数種類準備したり, 発展的な課題を準備したりするようになったことで, 習熟度の高い生徒の待つ時間が少なくなり, 生徒の学習意欲も高まっている。 △ 課題が進まない生徒に対して, 教師が個別に対応しているが, 実態差が大きく, 一斉指導が難しい場面がある。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	宮地正敏・小野恭一
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	時間と時刻

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 数字を十分に読めない生徒に対する時計の学習でどのように時間の概念を形成させていくか。 ・ 自分で数字を書けない生徒に対する手立ての在り方
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の内容を覚えていて、時計を隠していたが「時計のある場所」を指して、時計についての授業をしていたことを表現することができていた。 ・ 時計の文字盤に数字カードを置く際に、数字カードを置く場所を明確にしていなかったため、生徒はどこに置けばよいか迷っていた。 ・ 数字カードがラミネート処理したものであったことで、紙の上で滑ってしまい、置き辛そうだった。 ・ 示された時刻と同じ時刻の時計の写真を選びとる方法もある。
3 2を受けて、授業改善に取り組んだ点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 数字カードを置く枠を設け、置く場所を明確にするようにした。 ・ 数字カードについては、他の学習でも使用するもので、貼り付けることは難しかったので、数字カードと同じ数字の印刷された紙を文字盤に貼り付けるようにした。
4 授業改善の成果と課題、児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 枠内に紙を貼り付けようにしたことで、「どこに貼り付ければよいか」ということが明確になり、自分から数字を枠内に置く姿が見られるようになった。</p> <p>◎ 貼り付けられたワークシートを「できた」と指導者に見せる姿が見られるようになり、本人が「学んだ」成果、達成感を表出できるようになった。</p> <p>△ 示された時刻と同じ時計の写真を選び取ることは、日々マッチングをしているので、難なくできているようだったが、これからは時計の指し示す時刻と生活リズムを一致させていくことが今後の課題となるように思う。「この時刻の時には『昼食』、この時刻の時は『帰る時間』」ということを定着することができるように、常に時計の「針の形」と「行動」の関係性に意識させることが必要だと思われる。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	岩元美紀 ・ 東和史
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	かず, なかまあつめ

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- 指導計画の重点目標について
 - ・ 生徒Aの個別の指導計画重点目標には, 「実物の弁別とマッチングができる」という項目が挙げられている。この目標を達成するためには, 日常生活場面と教科の指導場面で継続した指導・支援が必要である。
 - ・ 生徒Bの個別の指導計画重点目標には, 「時計カードと教室カードを一緒に持っていき約束の時間になったら, 教室に帰ってくるができる」という項目がある。この目標を達成するためには, 数学の授業で時計を取り扱うことだけでなく, 普段から時計を手掛かりにした支援を行うことが大切である。また, 数の概念形成が不十分な実態であることから, 数の分解と合成, 一対一対応等にも取り組んでいく必要がある。
- T1 と T2 の役割の確認
 - ・ 生徒の実態が異なるため, 前半は個別の目標による個別学習を行い, 後半の一対一対応や色の弁別は集団での学習とする。その際はT1が進行し, T2が個別の支援を行う。
- 個人目標の設定について
 - ・ マッチングは日常生活場面でも大いに活用が考えられる課題であることから, 継続的に学習を行う必要があり, 本時も中心課題とし, 目標を設定する。
 - ・ 生徒Bに関しては, 数の概念の形成が課題の一つである。その基礎を養うために, 「1～3の数字を見て, 表示された数だけ物を入れることができる」という個人目標を設定する。
- 学習内容について
 - ・ 前半に個別の課題を行い, 後半の一対一対応や色の弁別は集団での学習とする。
- 指導の工夫について
 - ・ 授業の最初に流れを写真カードで提示し, 見通しを持てるようにする。
 - ・ 生徒の好む感触の教具を用いるようにする。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ④ 授業形態について
 - ・ 後半は, 集団での学習を予定していたが, 生徒が落ち着かなかったこともあり, 集団学習は難しく個別の学習とした。集団での学習場面の設定について, 今後も検討を重ねる必要がある。
- ⑤ 教具について
 - ・ 一対一対応は色付きの教具を用いてはどうか。また, マッチングの際は, 具体物から行ってはどうか。(生徒A)
 - ・ 色分けをするケースの大きさをもう少し大きくしたらどうか。また, 1, 2, 3のカードを容器に貼っておくのではなく, カードを作っておいて, 教師が出したカードの数だけ, ボールを入れるのはどうか。(生徒B)

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ④ 授業形態について
 - ・ 集団での学習活動の設定は今後の継続的課題とし, 今回は個別学習の充実を図った。
- ⑤ 教具について
 - ・ 一対一対応は色付きの教具を用いるようにした。また, マッチングの際は, 具体物(身近な物: ぼうし, えんぴつ等)から行い, 途中でカードマッチングへ移行した。(生徒A)
 - ・ 色分けをするケースの大きさを大きい物に変えた。また, 学習用の椅子を用いる等, 落ち着いて学習に取り組める環境の整備に努めた。(生徒B)

4 授業改善の成果や児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 生徒は前回の提供授業時と比べ, 落ち着いて学習に取り組める時間が増えた。学習環境の整備については今後も充実を図りたい。(生徒B)
- ◎ 色付きの教具を用いたところ, 正答率が上昇した。視認しやすさが原因の一つかと推察される。カードマッチングについては, 学級担任と連携を取り, 授業だけでなく日常生活場面でも取り組めるようにしたい。(生徒A)
- △ 集団での学習活動が設定できなかった。今後の検討事項としたい。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	隈元美香代 ・ 平田千登勢
教科・指導の形態	数学・習熟度別	単元(題材)名	かず, いろ, かたち

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- 学習内容について
 - ・ 前半に個別の課題を行い, 後半は集団での学習とする。
- 指導の工夫について
 - ・ 授業の最初に流れを写真カードで提示し, 見通しを持てるようにする。
 - ・ 動きのある活動を多く取り入れるようにする。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 教具について
 - ・ 手指の巧緻性に課題がある T さんにとって, 紐通し・トングの活動は有効だと思う。可能ならば, 全段階の粗大運動段階の重いものを持つ(バケツ・ソフトボールつかみ)なども効果的ではないか?
 - ・ 物の操作ではなく, 手指の操作を先にすべきではないか?
 - ・ トングの使用は, 力加減の学習にもなる。
 - ・ 色の弁別は, 立体, 形の弁別は, 平面で準備した場合, 触感触による違いの手掛かりがなくなる。
- ② 指導法について
 - ・ 「CD」と「絵本」の選択は, S さんの実態と意欲に沿った活動だと思う。活動のメリハリ, 変化, 流れ, 見通し, の面で集中力, 注視力, 状況の変化の指導に効果ありです。
 - ・ 手の動きに, 必然性をもたせる工夫が必要である。例えば, ブロックを胸ポケットに入れ, 人差し指と親指でつまむ動作を導くなど。
 - ・ 読み聞かせの方法と生徒の実態について, 対面がよいか? 同じ向きがよいか? 難しい。同じ向きの場合は, 共同注意の発達段階と捉えられるがどうか?
 - ・ S さんのように環境の変化に対応することが苦手な生徒への集中力の維持は難しい。課題の見通しを持たせるための厳しさもとても大切な指導方法だと思う。
 - ・ 落したフェルトボールを拾う活動は, とても重要だと感じました。厳しさや拾い終わった確認を本人とすること, オーバーアクションで賞賛するメリハリがあってもよかった。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ⑥ 教具について
 - ・ トングの活動をやめて, 手指を使った操作の活動を取り入れた。
 - ・ 紐通しでは, モールではなく, 紐に変更した。
 - ・ かたちの弁別では, 絵カードではなく, 具体物(鉛筆・消しゴム・オハジキ)に変更した。
- ⑦ 指導法について
 - ・ 厳しくするとところと賞賛するところのメリハリを付ける。

4 授業改善の成果や児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 生活でよく使っている具体物を使用することで, 良く見て弁別ができるようになってきている。(生徒 S)
- 離席も少しずつではあるが, 少なくなってきており, 見通しがもてるようになってきている。(生徒 S・T)
- 物の操作ではなく, 手指の操作にすることで, 途中で諦めずに取り組むことができるようになってきている。(生徒 T)
- ◎ モールから紐に変えても, 意欲的に取り組むことができている。(生徒 T)

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	川尻友美・福田佑美・柁木翔・ 藤山美由紀・中和田明宏・榮香菜子
教科・指導の形態	音楽（全体）	単元（題材）名	気持ちをこめて

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

（期待される児童生徒の姿，支援計画，指導計画の重点目標，授業づくりの視点，教材・教具，導入や指導過程工夫等について）

- 全体音楽での指導体制について
 - ・ 通常の音楽の授業に入らない教師がどの生徒についていいか判断に困っていた。
 - ・ 通常の音楽の授業に入らない教師は教材曲をあまり知らないのではどのパートに入っているかわからないので事前の打ち合わせが必要ではないか。
- 重複学級の生徒に対する支援について
 - ・ 生徒にあった教材（楽器等）がわからなかった。
 - ・ いつも指導している生徒ではないので，生徒の音楽的な反応に丁寧に対応できない。
 - ・ 集合場所を重複学級ごとではなく，学年ごとに並ぶと準備体操との流れがスムーズに行える。
- 指導の工夫について
 - ・ 生徒によっては布などを準備し音楽に合わせた揺れを楽しむなどの活動ができるのではないか。
 - ・ 手話チームは「花」や「地球」など具体物などを準備することで，動きが出るのではないか。
 - ・ パート練習では体育館の前方・後方では音が重なるので，場所を4カ所に分かれた方がいい。
 - ・ 手をつないで歌う活動は生徒がよく声が出るようになっていたが，動きに夢中になり歌えなくなる生徒もいた。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ① 指導体制について
 - ・ 指導案を配付するだけでは誰についていいかわからないなど教師の見通しが持てないので，事前にミーティングを学部全職員を対象に行い，担当する生徒を分担する。
 - ・ 指導するパートや教材曲の練習を定期的に行う。（15：40～などの時間を使って）
- ② 重複学級の生徒に対する支援について
 - ・ 集合場所の工夫が必要。
 - ・ 教材研究の時間を確保し，担当と担任と話し合っ教材教具を作成する。
 - ・ かかわり方や支援方法についてはどのようにかわるか事前にわかると授業に入りやすいので，担任と音楽担当者が連携する必要がある。
- ③ その他
 - ・ 全体音楽が他学年の友達とのいいかわりの場になっていて，同じパートで練習することで意欲も高まっている。
 - ・ 手話チームは細かい動きが難しい生徒も多いので，具体物や楽器などを準備する。
 - ・ 聴覚障害の生徒の対応について

3 2を受けて，授業改善に取り組んだ点

- ① 前日に，全体音楽に入る職員を対象にミーティングを行い，担当の生徒やパート分けを一覧にして提示した。また，パート別に合唱の練習を行った。
- ② 重複学級の集合場所については学年ごとに集合することで，その後の活動にスムーズに流れることができた。
- ③ パート別の練習場所を体育館，縫製室，音楽室，エレベーターホールの4カ所に分けて練習する。
 - ・ 聴覚障害の生徒についてはCDは聞こえないので，ピアノで旋律を弾くなどの同時提示を行う。

4 授業改善の成果と課題，児童生徒の変容について（成果…◎，課題…△）

- ◎ミーティングを行い，担当の生徒などをしっかりと確認できたため，見通しを持って授業に取り組むことができた。また，パート別に合唱の練習を行ったためスムーズに生徒の指導にあたることができた。職員の練習については今後も継続した取り組みが必要。
- ◎パート別の練習場所を4カ所に分かれたことで，それぞれのパートが集中して練習に取り組むことができた。
- △教材研究の時間を設定するのは難しいので，それぞれの担当が積極的に連携を取りながら準備を進める必要がある。
- ◎聴覚障害の生徒については，体育館では手話チームの場所をピアノの側にするすることで，意欲的に取り組んでいた。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	上園菜穂子
教科・指導の形態	美術	単元(題材)名	うちわをつくろう ～紋切り型の技法を知ろう～

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ 描く活動以外の表現活動を通して, 作品を作る過程の楽しさを感じたり, 仕上がった自分の作品を見たりして, 自分の表現する力に自信をもつ姿。
- ・ 自分以外の友達の作品の良さに気付き, 賞賛しあう姿。
- ・ ハサミを上手く使えない生徒への対応として, クラフトパンチやいろいろな大きさのハサミを準備する。
- ・ 活動に見通しをもちにくい生徒への支援として, 活動の流れや制作工程が分かるプリントを準備する。
- ・ 自分の作品以外に興味を持ちにくい生徒へ, 友達の作品に気づくことができるような言葉掛けや友達の作品が見やすいような座席に配置する。
- ・ 導入で集中力が途切れないように, 視覚的支援や板書計画を立てておく。
- ・ 参考作品を多数準備し, 生徒の意欲が高まるようにする。
- ・ 作品発表の時間を設け, 自分の作品を発表したり友達の作品を賞賛したりできるようにする。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ・ 紋切り型の色紙の折り方が3通りあったが, 支援シートが3通りをまとめた形で作っていたので, 混乱して上手く折れないでいる生徒がいた。
- ・ 制作の段階で, 机の上に見本や折り紙が散らばって煩雑になってしまった。
- ・ 生徒の実態把握ができていない部分も見えてきた。ハサミは使えるが, 重ねて切ることが難しかったり, 折り紙を上手く折れなかったりする生徒がいた。
- ・ STとの連携の取り方。CT・ST含めて9名で授業をするが, 今回, 指導案だけでなく細かな部分まで打ち合わせを行ったので, 授業の流れをサポートしてもらうことができ助かった。
- ・ 作品発表の場があることで, 生徒たちの表情が生き生きしていた。本時は数名の生徒しか発表できなかったため, 他の生徒の作品も賞賛できたら良い。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ・ 2回目の授業では, 生徒の実態を受けて, 折り方や切り方など個別に指導するようにした。
- ・ 紋切り型をうちわに貼り, 全員の作品をみんなの前で発表できるようにした。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)

- ◎ 紋切り型の技法を楽しみ, 紋様を組み合わせカブトムシに見えるうちわを制作できた。
- ◎ ハサミを使用したり, できあがりの紋様を楽しんだりして意欲的に制作に取り組むことができていた。
- △ 時々, 気分の落ち込みが見られ, 学習に参加しにくい場面がある。
- △ ハサミやのりなど道具の使用の仕方には課題があるが, 同じ紋様を繰り返し作ることで自信をもつことができたようである。紙を重ねて一人で切ることが難しいので道具の使用の仕方について支援していきたい。
- ◎ 花火をイメージして紋様を作り, 皆に見てほしいと制作に意欲的に取り組む姿が見られた。
- ◎ 教師と一緒に, 紙を穴開けパンチで切り抜き, 紙を千切る感触を楽しみながら制作することができた。
- △ 主体的に授業に参加できていたかの判断が難しいが, 出来上がった作品を見て楽しむことができた。作品をみんなの前で発表して満足感を得たりすることで, 制作意欲を高めていきたい。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	平石 厚史
教科・指導の形態	美術	単元(題材)名	万国旗を作ろう

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ 全3回で①模写②オリジナル(本時)③展示で実施した。
- ・ 最初からオリジナルは難しいのでは? と思い6パターンに分けるようにした。
- ※ 導入の部分で国旗を類型別に分ける活動を入れ,オリジナルの要素を少し入れて考えるようにした。
 - 国旗の数をもう少し少なくして分類するようにすれば, 難しく活動に時間のかかる生徒がいなくて済んだのではないか。
- ・ 自分だけの「国旗」なのか「旗」なのか。
- ・ 重複クラスの生徒には, パソコンソフトを利用して, 国旗の色付けでオリジナルの旗を作ることができるようにする。
- ・ 重複クラスの生徒は, パソコンを利用して作品を制作するのと, 実際に画材を使って画用紙等に描くのとは, どちらがよいであろうか。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- 制作時間について
導入の説明や活動を入れすぎて, 制作時間が短くなった。
説明の時間…専門的なものは削れないので, 活動的なものを入れる。
S Tの支援の工夫, 連携を。
- 重複クラスの生徒について
パソコンで色付けをするか実際に画材を使って色付けをするかは本人と相談して決めてはどうか。パソコンは, 画面や操作への支援が必要
国旗の選択肢が多い。もうちょっと少なくとも良いのではないか。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ① 導入の説明の時間をできるだけ短くして制作時間の確保に努めている。
- ② 導入の説明の際に, 教師から一方的に説明するのではなく, 考えて発表する機会を作ったり, ホワイトボードに貼ったり等, 活動を取り入れることを考慮した。
- ③ 生徒への説明が必要な内容について, S Tと事前に打ち合わせを行い, 生徒には全体で簡潔に説明して, 補足や具体的な内容については, ある程度, 担当のS Tに任せるようにした。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について(成果…◎, 課題…△)

- ◎ 導入部分を短くすることで, 制作時間を確保することで, 慌ただしく時間に追われることなく余裕を持って制作できるようになってきた。
- ◎ 導入部分での生徒の活動を取り入れ, 生徒が興味関心を持続できるように工夫したことで, 活動への意欲が増したようだ。
- ◎ C Tが導入部分で, 余分な説明を省くことができ, 制作時間を確保できるようになりつつある。また, C TとS Tが指導の要点を共通理解することができ, より個に合った指導ができるようになりつつある。
- △ 重複学級の生徒への課題の出し方について, 更に研究が必要である。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	宮ノ前 真志
教科・指導の形態	美術	単元(題材)名	動物園を作ろう

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> なぜ動物園だったのか → 関心を持たせる, イメージしやすい, 集団で展示できる 平面から立体への見立ての難しさ → 積み木 動物を選ぶ時の工夫 → 見本の画像プリント 制作への見通しをもたせる → 板書 + 生徒個々に制作手順プリントを準備
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<p>① 制作へ見通しをもつための手立ては有効だったか, また, 指導・支援はどうあればよかったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 平面から立体にすることは, ボディイメージをもつことが難しい生徒には, 難しいことである。 新聞紙で作った立体を, 実際に触らせる。 後ろや横など様々な角度からの写真を準備すれば, 見通しがもちやすいのでは。 学び合い → グループをつくることで友達の制作を見ることができる。 目当ての提示の仕方 → 芯を作り上げる バランスという言葉の難しさ → 視覚的にバランスの良い物と悪い物を比べる。 具体物を使って, 制作過程でどのように進むかを見せる。 <p>② 芯となる形を作るための手立ては有効だったか, また, 指導・支援はどうあればよかったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 重複学級の生徒に対する支援・手立て バランスという概念 → 生徒の実態把握が必要 写真や図ではイメージしにくい。 → 完成型から部分を切り離して大まかな形が分かる。 ぬいぐるみなどの立体を準備。 視覚的に難しい → 立体を触る。 素材の難しさ, 新聞紙(平面)から立体。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<p>① 制作への見通しをもつための手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 良い作品例と悪い作品例を提示した。 完成までの時数を確認し, 本時の制作のめあてを提示した。 グループ学習。 <p>② 芯となる形を作るための手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ぬいぐるみなどの立体を準備した。 実態に応じた導入の指導 → 2グループに分けて, それぞれで導入。 積み木をそれぞれの生徒に提示。 重複学級への支援 → 目玉シール
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 良い作品例と悪い作品例を提示することで, バランスなどの抽象的な言葉で示すよりも, 視覚的に認知することができて, 理解が深まったように思える。</p> <p>◎ グループ別導入をすることで, 生徒それぞれの実態に近い範囲の指導ができ, 生徒がぼーっとしている時間が少なくなった。</p> <p>◎ グループ学習をすることで, お互いの制作を見て, 学び合う場面があった。</p> <p>◎ 目玉シールがあることで, 作品の完成度が高まり, 達成感を得ていた。</p> <p>△ 立体への理解の難しさ</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	大重 耕平
教科・指導の形態	保健体育	単元(題材)名	短距離走・リレー

1 グループでの授業づくりで話題となったこと

(期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)

- ・ コミュニケーション面を充実する視点から, 生徒同士グループを組んで話し合い活動が多くできるように計画した。
- ・ 走る活動として飽きがなく充実した活動をするためにはどうしたら良いか。

2 授業提供後の検討会で話し合ったこと

- ・ 説明などを含めた導入が長かったため運動量を確保する視点で言えば, 展開での活動を長くし, 運動量の確保に努めるべきであること。

3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点

- ・ 導入で, 要点を絞って説明をする。
- ・ 授業開始前にビブスを配り, すぐ始められるようにする。
- ・ 動く活動時間の確保。

4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)

- ◎ 動く活動が多くなって, 楽しそうにしている生徒が多かった。
- ◎ 時間内に計画したことを実行できた。
- △ 基礎的な動きの定着が不十分であった。

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	小野 洋一郎
教科・指導の形態	自立活動・個別指導	単元(題材)名	環境の把握

1 グループでの授業づくりで話題となったこと
<p>○ 指導計画の重点目標について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 注視, 追視する力を高める。 ・ 動きの模倣をしたり積み木を積んだりするなど, 力を調整して身体や手指を使えるようになることを目指す。 <p>○ 指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教室で教師と一対一で活動し, 周囲の余計な刺激を可能な限り排除し, 活動に集中できる環境作りをする。 ・ 着席した状態での活動ばかりでなく, ハードルや物を探す活動のように身体を使った活動も取り入れ内容に変化を持たせることで, 生徒の興味関心や意欲を持続できるようにする。
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<p>① 生徒の視覚障害的な問題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 注視, 追視の持続が難しい。そのために, 模倣がうまくできない。模倣ということでは、粗大な動き・細かい動きの模倣, 聴覚の模倣など, いろいろと考えられる。様々な方法で取り組んでみてもよいのではないか。 ・ 物を探す活動のときに注視・追視ができることをねらうなら, 転がる音のヒントを与えない方がよい。 <p>② 指導の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉だけでは学習がどこまで続くかわかりにくいので, もっと視覚の手がかりを与えた方が活動に見通しをもたせやすい。 ・ 生徒に対する支援を徐々に減らしていくような, 教材教具の準備・工夫を行う。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<p>① 生徒の視覚障害的な問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒にとって難しい模倣の活動は中止し, 前段階の注視, 追視する活動を多く取り入れることで, 物を見る活動に慣れさせるようにする。状況を見て, 再度模倣を取り入れるか検討する。 ・ 物を探す活動では物を置く瞬間を確実に見させ, そのことを手がかりにして探すようにさせる。 <p>② 指導の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 始めに, ボード上に写真・文字カードで6つの活動を示し, 生徒の希望順に行う。一つ終わる度に評価(△, ○, ◎)を行い, ボード上のカードを取り外していく。ミニハードル越えのときには, 7個の花のカードをボード上に付けておき, 1回終わる度にカードを外させる。このようにして, 活動に見通しをもたせやすくさせる。 ・ ハードルの準備, 片付けをさせることで活動への意識を高めさせる。また, 輪っか入れでは, 生徒の実態に合った輪を準備したり, 支柱を動かないように固定したりするなど, 教材教具の工夫をすることで, 支援を少なくして自分の力でできる状況を増やしていくようにする。
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<p>◎ 教師と一対一で活動する環境の中で, ほとんどの時間活動に集中できていた。(音楽が周囲から聞こえてくると, そちらに関心がいってしまうことがたまにあった)</p> <p>△ 注視, 追視する活動は生徒が見るまで待ったり, 言葉掛けをしたりした。そのように注意を促すと見ようとするが, 時間が短く, 自分から見ようとすることも少ない。</p> <p>△ 活動は毎回スムーズに進んだ。何の活動をするか言うことができた。が, カードの提示, 撤去などが見通しをもたせられていたかは把握できていない。</p> <p>◎ ハードルの準備, 片付けをする際に, 活動が早く終われば片付け後に大好きな絵本の読み聞かせをすることを伝えた。このことも意欲を高める要因になったかもしれない。教師側が教材教具の工夫をすることで, 自分でできる状況を増やすことができたが, さらに改善・工夫が必要だと思う。</p>

提供授業のまとめ

対象児童生徒	高等部 III課程	授業提供者	久保 香菜子
教科・指導の形態	自立活動・個別指導	単元(題材)名	心理的な安定・コミュニケーション

1 グループでの授業づくりで話題となったこと (期待される児童生徒の姿, 支援計画, 指導計画の重点目標, 授業づくりの視点, 教材・教具, 導入や指導過程工夫等について)
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習内容について <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習に集中できない理由として, 活動に魅力がない, 周りが気になる, 見通しが持てない等, 沢山あげられる。どんな時に集中して取り組めたか, その時の支援の仕方, 環境・言葉掛けなど記録しておく。 ○ 終わりど始まりを明確に <ul style="list-style-type: none"> ・ 終わりど始まりを明確にしないと見通しが持てず, 活動が中途半端になってしまう。特に, 集中が長続きしない生徒に対して終わりをしっかり行うようにする。 ○ 指導の工夫について <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が集中するためには, 支援と言葉掛けの工夫をする。 ・ 生徒の自発的な要求を引き出すために, 場の設定や言葉掛け等を工夫する。
2 授業提供後の検討会で話し合ったこと
<ul style="list-style-type: none"> ① 終わりど始まりを明確に <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体の終わり始まりは生徒もわかっているようだが, 一つの活動に対しての終わり始まりがよくわからないまま活動に入っていた。もっとじっくり時間をかけて行よようにする。 ② 見通しの持たせ方について <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体の見通し表は, 生徒もわかりやすいものであったが, 増やす方法で行っていたので, 減らす方法で行ったほうがもっと活動しやすくなる。活動中の見通しの持たせ方も必要である。また, 国数とも関連させ, 一つの方法を定着させたほうが良い。 ③ 指導の工夫について <ul style="list-style-type: none"> ・ 積み木では, 積み木そのものに集中できるように胸ポケットに入れることで, 本人の意識付けになっていた。また, 手指機能の向上にもつながっていた。生徒が行動・行為に移す前に教師が先に目的物を焦点化させていた。自発性を尊重するために少し待ちの姿勢をとるよようにする。
3 2を受けて, 授業改善に取り組んだ点
<ul style="list-style-type: none"> ① 活動の始まりと終わりについて <ul style="list-style-type: none"> ・ 一つの活動の始まりと終わりにじっくり時間をかけて行う。(活動を終えたら, 頑張ったシールを貼る→次の活動の確認→カードを見て自分で移動する という流れを作る) ② 見通しの持たせ方について <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動の見通しの持たせ方として, 見通し表の中のカードを減らす方法で行う。また, 生徒にマジックテープを剥がさせることで, 終わりの見通しを持たせ, 活動に集中して取り組めるよよう工夫する。 ③ 指導の工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の自発性を尊重するために, 少し待ちの姿勢をとる。活動に移りやすいよように場の設定をする。
4 授業改善の成果と課題, 児童生徒の変容について (成果…◎, 課題…△)
<ul style="list-style-type: none"> ◎ 始まりと終わりにじっくり時間をかけて行うことで, 次の活動にスムーズに移動し, 始めることができた。 ◎ 見通しの持たせ方では, 全体・活動中の見通し表を減らす方法で行うことで, 生徒自身も見通しが持て, 集中して活動に取り組むことができたよように思う。 △ 自分でカードを見て移動する際に, 教師側からの働きかけ(言葉掛けや動作)が多かったよように思う。 ◎ 好きな活動(エアポリン)で, 教師側からの支援をやめると, 自ら「お願い」の要求をすることができた。また, 活動中であっても教師側にお願ひしたい動作があるときは, サイン又は, 教師の体を押すことで表現することができたよように思う。

お わ り に

本年度は、平成24～25年度の2か年での研究のまとめとして、11月8日には鹿児島県授業力向上プログラムに係る授業公開として、外部から100名余の参加者を得て開催することができました。授業づくりにテーマを設定し、授業者を支援するために、総合教育センターから指導者を招聘し、インシデントプロセス法等について御指導いただき、関係する職員で知恵を出し合い、多くの職員が授業力を向上できたと実感することができました。2年間で身につけた授業づくりの実績を今後の教師力向上に生かすとともに、他校へ転出した際には、本校での経験を他校での研究へ生かしていくことができるものと信じております。

さて、特別支援教育が整備されていく中で、インクルーシブ教育システムの構築が幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において、今後整備していくことが大きな課題となってきます。平成25年度に文部科学省のインクルーシブ教育システム構築モデル地域事業（スクールクラスター）〔本県事業名「教育資源活用モデル地域事業」〕に奄美市教育委員会が推進地域として、また、奄美大島群島内の教育委員会がモデル地域となったことから、本校では、①センター的機能の充実、②合理的配慮協力員への助言・情報提供（基礎的環境整備、合理的配慮の情報収集及び国立特別支援研究所の合理的配慮等のデータベース化のための情報提供等）③大島教育事務所・奄美市教委との連携し、各小中学校等への支援について取り組んできました。平成25年度の成果を踏まえ次年度以降の取組を更に拡充し、県内全域へ参考となる成果を提供できればと考え支援部員及び特別支援教育コーディネーターをはじめ全職員で取り組んでいるところです。

研究の成果をまとめましたので御一読いただき、御意見をお寄せいただければ幸いに存じます。

最後に、本校では学校評価の「自己評価」や外部アンケートを基に学校運営の改善に取り組んでいるところです。本年度の学校評価で課題として見えてきたものは下記のとおりでした。その中の一つに「中学部、高等部での中等教育の充実」があげられていました。この課題解決に向け、次年度は校内体制を整備し取り組んでいきたいと考えています。

記

- 1 「中等教育（中学部・高等部の6年間の連携・継続性）の充実」
- 2 「性に関する指導」
- 3 「他学部・他学級への計画的授業参観による授業力向上」
- 4 「情報モラルの指導の充実」

平成26年3月

教 頭 上 原 峻

研 究 同 人

【校長】 中村 良一	【教頭】 上原 峻	【事務長】 徳永 友子
------------	-----------	-------------

小学部			
東	明	美	
入	本	進	
森	純	乃	
嘉	村	徳	紀
實	島	あ	やの
中	村	か	おり
永	留	梨	香
吉	岡	聖	子
竹	中		治
原		正	憲
惠	島	光	美
飛	永	雄	一
寺	下	悟	子
尾	前	誠	一
堀	切	忠	浩
団	塚	ル	ミ
前	山	優	香

中学部			
伊	勢	知	子
若	松	千	代
朝	木	修	一
板	敷	大	和
川	畑	真	希
古	村	洋	介
徳	重	浩	二
田	浦	清	美
墓	本	武	志
小	倉	寿	彦
野	口		剛
小	薄	朝	美
五	反	真	希
二	禮	智	香
川	原	恵	理
富	田	浩	子

高等部			
栢	哲	也	
折	田	美	紀子
隈	元	美	香代
有	満	勝	利
竹	崎	浩	記
達	村	望	実
前	原	修	一
濱	田	千	代美
上	園	菜	穂子
宮	崎		究
宮	ノ	前	真
最	上	淑	志
平	石	厚	史
前	田	み	ゆき
川	尻	友	美
里		康	一
大	重	耕	平
米	里	み	なみ
東		和	史
栄		華	子
小	野	洋	一
久	保	香	菜
栢	木		翔
岩	元	美	紀
小	野	恭	一
宝		政	樹
春	口	陵	二
平	田	千	登
渕	上	新	一
平		麻	衣
向	井	真	実
宮	地	正	敏
榊		慶	太
藤	山	美	由
水	野	高	明
中	村	志	保
元	尾		毅
板	坂	佑	美
中	和	明	宏
榮		香	菜

養護教諭		
福	永	さ
島	元	渚
		紗

栄養教諭		
今	村	奈
		都

訪問教育非常勤講師		
深	川	ケ
春	山	メ
碓	山	由
		美
		乃

事務部			
下	津	尚	子
小	山		誠
龍	田	孝	一
津	川	興	弘
福	田	智	和

看護師		
碓	山	由
與		ひ
		より

前年度転出者			
五	反	田	勝
早	川	佐	和
池	田	昌	代
川	尻	雅	一
橋	口	龍	太
山	田	明	美
鮫	島		博
坂	元	美	玲
田	下	友	美
中	間	道	徳
外	園	耕	司
森		知	子
福	田		洋
佐	々	木	章
東	山	崎	雄
重	村	奈	美
重	田	保	身

資料



日時・場所	月 日 ()
学習集団	【 】部 【 】課程 【 】
教科・指導の形態	
授業者	
特に対象とする児童生徒	

① 授業に関連する実態（これまでの授業・実態把握・チェックリスト等から）

Aさん○
○
○
Bさん○
○

② ☆…本人・保護者の願い（個別の教育支援計画から）&◎…本題材に関連する重点目標（個別の指導計画から）

☆
☆
教育支援計画・指導計画を丁寧にみていく作業
◎
◎
◎

③ 本時の目標

○
○
個人目標
○
○
○

④ 参観の視点

1. チーム、授業提供者で設定する。2つ～3つ。
2. 授業づくりで考えた大切にしたいこと、特に見てほしい児童生徒の学習活動、
課題と感じていることなど。
3. 係から示した「授業づくりや授業参観の観点例」から引用してもよい。

⑤ 本時の実際

時間	主な学習活動	指導上の留意点（*）・指導の手立て（▽）
	<p style="text-align: center;">☆ 期待される児童生徒の姿</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p style="text-align: center;">ここが明確に記入してあると 授業者の意図も見えやすく、 参観する側も助かると思われます。 必要に応じて全体と個人を分けて記入してください。</p> <p>（例）</p> <p>☆（全）教師の示範に注目する。</p> <p>☆（A）自分からカードを使って「手伝ってください」の依頼をする。</p>	<p>* 生徒を前方の机の近くに集めてから示範を行う。</p> <p>▽ 「手伝ってくださいカード」を机上に準備する。</p>
準備等		

⑥ 評価

-
-
-

(書式②) 授業参観・授業検討会用マトリクスシート

学習活動	学んでいたところ	学びにつまずいていたところ	感想・意見・課題・改善策
<p>導入</p> <p>展開</p> <p>終末</p> <p>点から見てほしい学習活動を絞り込んで書いても可 指導過程に沿って学習活動を書く。授業づくりの視</p>	<p>付箋紙</p> <p>児童生徒の姿を書く。</p>		
	<p>付箋紙が集中したところが 授業検討会のメインの話題 になってくると考えられる。</p>	<p>意見や感想 などを書く</p>	
その他（指導案・教師のかかわり・教材教具・他教科との関連等について）			
<p>上記以外の意見の付箋紙を自由にここに貼る</p>			

(書式③)授業提供後 授業改善CHECKシート

作成日 月 日

対象授業 () 学部 () 課程 ()
教科・指導の形態() / 単元(題材)名「 」

○本授業における ・ 児童生徒の変容 ・ 学ぶ姿や意欲 ・ 今後の課題 等	
Aさん	
Bさん	
提供授業における 参観の視点	授業検討会で出された具体的な改善のアイデア
その他 (新たな課題・教材教具・生徒の評価・教師の評価・意見・感想など)	

授業検討会の流れ（80分設定）

準備

- ① コピーしたマトリクスシート（A3サイズでグループの数の分用意する）をグループの机上に配付しておく。※付箋紙は、あらかじめ近い意見のものどうしをまとめてからコピーをとるようにする。
- ② 付箋紙（2.5cm×7.5cm）をグループに分けておく。
- ③ あらかじめ参加者を複数のグループに分け、進行係と記録係を決めて、会場を設営する。
- ④ 会の流れを提示しておく。（板書 or 掲示 or モニター等で提示）
- ⑤ 授業者と打ち合わせを行い、授業者の授業に関する課題やマトリクスシートで意見が多く出されたところなどから参加者に話し合ってもらう話題（討議の柱）を焦点化しておく。

流れ

	会の流れ	内容
1	5分 進め方の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会の流れと時間設定について説明をする。 ・ 目的の確認 この授業検討会は、児童生徒の学ぶ姿の確認、授業者の課題解決、よかったことの共有、参観者から付箋紙にて出された課題に対する解決策を授業者と考え、互いに提案しあう場（授業者支援会議）とする。
2	7分 授業者より	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業反省と授業意図に関する説明、生徒の様子、授業づくりの視点、この検討会で一緒に考えたいこと、参加者からもらいたい意見やアイデア等を授業者が説明。（授業提供後に<u>時間に余裕があれば紙面にまとめて提示してもよい。</u>）
3	50分 グループ内検討 ※進行係が進める ・マトリクスシートの確認（3分） ↓ ・意見を書く時間（7分） ↓ ・グループ検討（35分） ↓ ・まとめ（5分） ※司会者は終了5分前を予告	<ol style="list-style-type: none"> ① 「マトリクスシート（参観者に付箋を貼ってもらったもののコピー）」を各グループのメンバー全員で見て、よかった点、課題の把握をする。グループの進行係より今日の話し合いの柱について確認する。 ② 各グループの進行係が中心になって、マトリクスシートで課題として挙げられたこと、授業者の感じている課題等に対する改善策のアイデアやプランをグループ内で出し合う。参加者は自分の意見を付箋紙に記入し、発言しながらマトリクスシートに貼っていく。話し合いの中で出てきた新たな課題やよかった点も並行して確認していく。（他の人の意見への便乗大歓迎） ③ 記録係は話し合いと並行して、以下のことを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 意見の書かれた付箋紙を分類して貼り付け直して整理する。 ・ 発言のみで付箋紙に書かれていないことがあれば記録係が付箋紙に記入し、マトリクスシートの該当部分へ貼り付ける。 ・ 話し合いで出た意見をまとめて発表に備える。
4	8分 グループ発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各グループの記録係が行う。具体的な改善策や出た意見を発表する。 ※ グループの数に合わせて時間設定（5～10分）をする。
5	5分 授業者より	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各グループの発表を聞いて授業者が今後の授業に生かせることについて述べる。また、新たな課題については解決の仕方等について確認をする。
6	5分 指導助言	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各グループの発表や授業者からの発表を受けて、指導助言をもらう。
7	終了	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各グループのマトリクスシートを回収し、意見を集約して共有化する。

ワークショップ型授業研究についての意見集約

<小学部>

視点	メリット（よいところ）	デメリット（気になる点・やりづらい点）	改善策・アイデア
<p>授業者</p>	<p>新たな視点の発見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ いろいろな考えが出てくる。 ○ 気づいていない考えがもらえる。 <p>課題解決に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業者のもっている課題を解決するために、多くの意見をもらえる。 ○ 建設的な意見がもらえる。 <p>チームでの授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 個人の負担の軽減。 	<p>新たな視点の発見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ グループ外の意見がほしい。 ○ 授業者が一人の場合、他の先生の授業を見て学ぶことができない（子供の成長がわかるメリットはあるが…）。 <p>指導案の深まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業内容は深められるが、指導案や目標は深めにくい。 <p>授業研究の深まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業者が課題としていることが深まりにくい。 	<p>授業者</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業者は複数いたほうがよい（他者の授業を見て参考となる and 負担軽減）。 <p>授業研究の深まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業者からの協議の柱の提供 ⇒ 質疑応答の時間を設ける。 ⇒ 円滑な進行の為、事前に授業者への質問事項を貼る。
<p>参観者</p>	<p>意見のしやすさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 経験に関係なく意見しやすい。 ○ 意見が言いやすい。 <p>気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 他の意見を聞いて気づくことが多い ○ 授業のヒントを得ることができる。 ○ 即実践につなげることができる。 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一言書けばよいので気が楽。 ○ 他と異なる意見を書こうとすることで気付きをもてた。 ○ 自分と同じ意見があることで、自信を持つことができる。 	<p>意見の多さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 意見が多く、授業者の課題解決に至りにくい。 ○ みんなの意見を読み上げたり、まとめたりすることに時間を要し、深めることや焦点化が難しい。 <p>意見のしにくさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業を参観できなかった場合、意見が出にくい。 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 他者と異なる意見を探すことが難しい。 	<p>テーマ・柱の決定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ テーマを決めて付箋を絞り込み、意見を深める。 ○ テーブルが三つあったので、導入・展開・終末を話し合う部分を固定する。
<p>付箋紙・マトリクスシートの活用等</p>	<p>意見の出しやすさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことをメモしやすく、意見も言いやすい。 <p>わかりやすさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ マトリクスシートだと色分けしていることもあり、目に見えて分かり、まとめやすい。また、話し合うことも絞りやすい。 	<p>参加のしにくさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 初めての人は参加しにくい。 ○ マトリクスシートや付箋紙の記入の仕方に練習が必要。 <p>類型化のしにくさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 付箋紙の色とマトリクスシートの欄が一致していない。 ○ 授業前に付箋紙を類型化しにくい。 <p>マトリクスシート等様式</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 書式が複数あり難しく、負担感があった。 	<p>付箋紙</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 色分けは必要ない or 2色でよい。（「よい点」と「課題点+改善点」） ○ 授業研究の際、発言しながら付箋紙を貼った方がよい。 <p>マトリクスシート等様式</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 緑⇒赤、黄⇒赤とつながることが多いので、表の形式を変えた方がよい。 ○ 重複する様式があったので、シンプルにした方がよい。

<中学部>

視点	メリット (よいところ)	デメリット (気になる点・やりづらい点)	改善策・アイデア
授業者	<p>授業者の課題解決 ○授業者が設定した討議の柱(課題)についてたくさんの意見がもらえる。</p> <p>話しやすい雰囲気 ○授業者は1対参加者ではないので前向きな気持ちで参加でき、話しやすい雰囲気ができる。</p> <p>新たな視点の発見 ○さまざまな視点(立場)から意見が出てくる。</p>	<p>授業者の思い ○付箋の質問に答えなかったができなかった。 ○討議の柱より授業についての意見が欲しい。 ○直接意見をもらいたい。 ○授業者の思いを伝えきれない。</p> <p>授業研究の深まり ○するどい視点の意見は出にくい。 ○ある1つの話題を深めるには不向き。</p> <p>授業者の動き ○授業者はどのような動きをしたらいいか迷う。</p>	<p>両方取り入れる ○ワークショップ型と従来型の授業研究の形式(授業者と参加者が向かい合う)の良さがあるので、両方取り入れるのが良い。</p> <p>質疑応答の時間の設定 ○従来型の質疑応答・意見交換の時間を設定する。 ○絶対答えてほしい質問を貼る欄を設ける。</p> <p>授業者の動き ○各小グループを授業者がまわり参加者との意思疎通をする。</p>
参観者	<p>意見のしやすさ ○課題を明確にしていることで意見しやすい。 ○少人数なので、意見しやすい。 ○経験に関係なく意見しやすい。</p> <p>達成感がある ○短時間で多くの視点からの意見が聞ける。 ○多くの意見を広い範囲で述べられる。 ○気合いを入れて授業参観に臨める。</p>	<p>意見の多さ ○柱を意識しないと意見が広がりすぎてしまう。</p> <p>意見のしにくさ ○直接授業者に聞きたいことを聞く時間がない。 ○話したいことが、自分のチームの討議ではない。 ○柱を決めると意見が出にくい。</p> <p>その他 ○他のチームの全ての意見を聞くことができない。 ○ワークショップ型のルールを全員が理解していないといけない。 ○ファシリテーターの技術が大きく左右する。</p>	<p>質疑応答の時間の設定 ○授業者への質疑応答の時間を設ける。 ○絶対答えてほしい質問を貼る欄を設け、授業検討会の中で答えられるようにする。</p> <p>気付いたことを話し合う ○付箋紙に目を通して、気付いた点などを話し合った方が、参加者の意見が出るのでは。</p> <p>ワークショップ型の練習</p>
付箋紙・マトリクスシートの活用等	<p>意見の出しやすさ ○みんなで考えるという雰囲気がある。</p> <p>書き手の真意が見えやすい ○色分けで、例え曖昧な書き方でも、書き手の真意が見えやすい。</p> <p>達成感がある ○ヒントや助言がより多く得られ参考になる。 ○授業を見る視野を広げられる。 ○アイデアや意見を共有できる。</p> <p>記録として確実に残る ○細かいことでも伝えやすい。</p>	<p>意見の多さ ○時間内にまとめられない ○ファシリテーターの技術が大きく左右する</p> <p>書き手と読み手の解釈の違い ○プラスに書いたつもりがマイナスにとられる内容もある。 ○文字情報だけでは、書いた人の本意が分からない</p> <p>参加のしにくさ ○初めての人は戸惑う。</p> <p>書きにくさ ○言いたいこと、伝えたいことをうまく書けない。</p> <p>類型化のしにくさ ○仕分けの人のさじ加減で、仕分けが変化する。</p> <p>その他 ○色分けを気にしすぎてあまり書けないような気がする。 ○付箋から出した討議の柱と授業者が語ってほしい柱に違いがでることもある。</p>	<p>ワークショップ型の練習</p> <p>付箋紙 ○OPC上でみんなで共有してデータ化を行う。 ○メリット、デメリット、改善策と色分けしてあることで、書き手の真意が伝わる。 ○語りながら付箋を貼る。</p> <p>○付箋紙に書かれた内容を確認補足する</p> <p>○同じ色にしては?</p> <p>付箋の集中した部分を話し合う ○柱を立てるよりは付箋が集中したところを話し合う。</p> <p>付箋に書く柱を書きやすいものに</p>

<高等部>

視点	メリット（よいところ）	デメリット（気になる点・やりづらい点）	改善策・アイデア
授業者	<p>新たな視点発見 ○新たな視点やアイデアを確認し、改善できる。 ○授業に関する疑問や解決策を聞くことができる。</p> <p>チームでの授業づくり ○参観者と一緒に授業を作ることができる。（負担軽減）</p> <p>記録としての有用性 ○記録として残せ、振り返りにも役立つ。 ○マトリクスシートには自分の長所や課題が凝縮されている。また意見も受け入れやすい。</p>	<p>授業研究の深化不足 ○授業者の思いや意図をあまり聞けない。 ○話題にしてほしいところが話し合われない。 ○指導の手立てにはなるが、指導のねらいなど本質的な話題につながらない。</p>	<p>授業者にとっての授業研究深化の手立て ○授業研究の最初に質疑応答を入れる。 ○授業者が話題にしたいことを討議の柱にする。 ○授業者が話を聞きたいグループには間接参加できる。</p>
参観者	<p>意見や気づきの提示しやすさ ○授業者へ自由に意見を発言しやすい。 ○新たな視点やアイデアなどの気付きがある。 ○授業をお互いに公開・提供できる環境がよい。 ○授業者の意見と参観者の意見を聞くことができる。 ○少人数でいろいろな立場の方が意見を出しやすい。</p>	<p>授業研究の深化不足 ○参観していないと授業者への質問や意見がしにくい。 ○討議の焦点化が難しく、深まりにくい。 ○子どもの変容について語られない場合がある。</p> <p>授業参観のための体制作り ○授業を1単位時間参観できるような体制作りが必要である。</p>	<p>授業研究の時間保障 ○時間があれば、再度話合う内容を検討することで、更に話が深まるのではないかな。</p> <p>討議のメンバー構成 ○グループにSTなど授業者を入れると質問しやすい。</p> <p>授業参観のための体制作り ○授業参観のためには時間割の調整が必要である。</p>
付箋紙・マトリクスシートの活用等	<p>意見や気づきの提示しやすさ ○意見が記録に残り、ゆっくり振り返ることができる。 ○伝えたいことを自分の中で整理して発表できる。 ○授業に関する様々なアイデアや方法を学べる。 ○3色に色分けされ、見やすく、まとめやすい。 ○同意見が多ければ、課題も焦点化しやすい。 ○意見を他の人に伝えやすく、意見交換が活発になる。</p>	<p>類型化の難しさ ○多くの意見が出すぎるとポイントをまとめるににくい。 ○多数意見が焦点化されるため、少数意見の大切さを見落としてしまう。</p> <p>新たな意見や気づきの確保 ○参観者が少ないと、意見がグループ内に留まったり、アイデアが少なかったりして改善点が見えにくい。</p>	<p>マトリクスシートの提示及び改善点 ○ホワイトボードにマトリクスシートを設置する。 ○同じような意見は正の字でまとめると見やすい。 ○マトリクスシートの中に「その他」の意見を吸い上げるような新たな項目を設定する。</p> <p>討議を円滑に進めるための提案 ○課題を絞り込んだり、討議の柱について話合ったりするときは、メモがとれるような専用の別紙を用意する。</p>

平成25年度テーマ研究 今年度の取組に関するアンケート 集計結果（抜粋）

- ※ アンケート回収数 < 小学部：16人 中学部：16人 高等部：37人 >
集計表の中の各学部の単位のない数値は%（少数第一位を四捨五入したもの 例：“35.5%→36%”）を表す。総計が100%になっていない質問は、無回答者がいた質問です。

I 集中実践期間の取組についてお聞きします。

- 1 集中実践期間を設定し、チームごとに授業提供と相互参観の取組を行ったことで、期間以前と比較して授業づくりのPDCAサイクルが活発になった実感がありますか。

	小	中	高
A とても実感できた	31	19	3
B 実感できた	63	81	20
C 普通	6	0	57
D あまり実感できなかった	0	0	20
E 実感できなかった	0	0	0

そのように評価された理由をお書きください。

<小学部>

- チームで話すことで、様々なアイデアをもらうことができた。
- いろいろな意見や自己評価により、次の授業へ生かすことにつながったため。
- 各々の普段の実践、それまでの経験も合わせて話し合うことができた。発表が終わった今、今後も取り組んでいく。
- 指導案を作成することで、意識しながら授業に取り組むことができた。
- 自分の指導が適切であったか、振り返る習慣がついたため。
- 授業準備や授業研究を行うことで、回を重ねるごとに改善し、いろいろな工夫が見られた。
- 授業研究終了後、改善点を生かした授業を展開されていた。またそのことを休息时间などに職員同士で話題にするなど、気軽に授業の話ができるようになった。
- 自分の中に次に生かそうという意識が出てきた。
- 授業を見て、みんなの改善策を聞いて、授業が変わり児童の姿が変わってきたのを見ることができたから。
- 授業者が一人で子どもが一人だったので、子どもへの手立てを考え、成長が見られた。普段一人で悩んで手立てを考えているが、いろんな人の意見を聞いて、普段からも取り組むことは大切なのではないかと感じた。とても達成感があった。
- 事前に提供された授業を参考に授業づくりを行うことができた。

<中学部>

- 授業についてじっくり語れたのが良かった。(5)
- 授業の計画段階からチームで話し合い、課題や目標設定など共通理解しながら実践できた。(2)
- 振り返り改善策について話し合うことができた。(2)
- それぞれのチームで、活発な話し合いがされていた。
- 期間後に、より具体的に話し合えるようになった。
- グループでテーマを決めて対象生徒も決めて授業することでその生徒の変容が見られた。
- 2年間取り組んだことが活性化につながっている。
- 他の学級の設営及び生徒の実態反応を見据えた指導・手立ての仕方・タイミングなどを意識していくようになった。

<高等部>

- △ 時間がとれず授業を参観できなかった。(5)
- △ テーマ研前後でサイクルが活発になった訳ではなく変化がないため。(3)
- △ 日頃から教科チームで話をしたりして授業をやっているから。
- △ 「テーマ研用」の授業になったように感じる。
- △ これまで同様の形・レベルで授業づくりに取り組みました。
- △ 生徒の実態が違うから授業を通しての変化が分からなかった。
- △ チーム内の参観ができず、C、Aがあまりできなかった。
- △ 授業参観者が0だったため、授業提供したものでは授業研究ができなかったため。
- △ 忙しい時期と重なり、チーム内での話し合いもあまりできなかったように感じた。
- △ チームで集まり話し合う機会はあったが、昨年と比べると少ない気がした。
- △ 自分の授業を実践することに精一杯で、チームで集まることもままならず、他の授業を見ることもできなかった。
- △ 授業づくりの中でC・T・S Tとの連携、共通理解が授業を展開する上で大切だと思っています。集中実践のときは、普段よりお互い意識して共通理解できており、そうするとやはり、こういった授業づくりは大事だと実感できましたが、PDCAサイクルが活発になったという実感はあまり湧かなかったです。いつもどおりといった印象です。
- △ PDCAサイクルの重要性について理解することはできましたが、教科によって相互性や継続性が難しいものもあり、定着とまではいっていないのが現状です。
- もともと個々でやっていたが、チームでじっくり話す機会をもつことで、他の話題も挙がりして、「悩んでいること」「思っていること」といった話ができる。(2)
- 参観する機会があることで、授業する時にどうしたらいいか考えることができたから。(2)
- すべての単元ではなかなか難しいが、授業づくりを考えていかなければと思う単元についてはペアで話し合う時間をとったり、チームの他の先生の意見や取り組みを参考にしたりする姿勢がついてきたため。
- ミーティングを行い、対象児童生徒について細かく打ち合わせなどができ、実践に生かした。
- 自分で授業を考える際、チームごとで話し合った内容について考えたり、取り入れたりして意識することができたため。
- 管理職の先生が来てくださったので。
- 時間の合間などに話し合いを行いました。もっと話し合える機会も増えればと思います。

- 2 集中実践期間に相互に授業参観を実施しました。授業参観に参加された回数（授業の一部分の参観も1回でカウントしてください。）について教えてください。

	小	中	高
A 0回	0	0	22
B 1回	12	6	28
C 2回	31	50	28
D 3回	38	31	11
E その他	19	13	11

※ その他 (小) 5回 (中) 5回、7回 (高) 5回、4回、7回

- 3 まとめに記載してあるため、省略
- 4 あなたが所属されたチームはどんな時間帯を活用して授業の打ち合わせや授業検討会を実施されましたか。あてはまるものに○を付けてください。(複数回答可)

A テーマ研究の日

小	中	高
39	75	60

- B 水曜日の教材研究の日
 C (職員作業等のない) 金曜日の教材研究の日
 D 会のない日の放課後
 E バス発車後～16時の間
 F 16:50以降
 G その他
 ※ その他 (高) 空き時間, 紙面

28	44	23
4	6	3
21	38	54
0	6	6
4	19	20
4	0	17

- 5 テーマ研究の中で小集団(チーム)での授業実践(授業づくりのPDCAサイクル)に取り組んだ成果について、次の項目の中であてはまるものの口にチェック✓をつけてください。(複数回答可)

<A 授業づくりの話し合いをすることで>

- 1 一人一人の実態について丁寧に考えることができた
 2 教育支援計画や個別の指導計画を意識して授業づくりや指導をするようになった
 3 授業づくりの視点が明確になった
 4 教材・教具を協力して準備することができた
 5 各教科・領域の年間指導計画を意識できるようになった
 6 その他
 ※ その他 (高) 日々の授業の振り返りきっかけになった。

小	中	高
33	75	54
17	69	11
21	75	51
19	25	40
10	25	17
0	0	0

<B 授業提供・授業参観をすることで>

- 1 相互に授業参観し合う自然な雰囲気ができた
 2 参観することで他の先生のよいところ(指導方法やスキル)を学ぶことができた
 3 授業参観するときの視点(どんなところを見ればよいのか)が明確になった
 4 授業を参観されることへの抵抗感が少なくなった
 5 その他
 ※ その他 (高) 教材・教具の工夫ができた

小	中	高
22	56	9
42	88	77
22	44	29
14	19	11
0	0	0

<C ワークショップ型の授業研究をすることで>

- 1 児童生徒への適切な指導であったかを振り返ることができた
 2 授業の改善について具体的なアイデアやヒントを得られた
 3 児童生徒の変容を実感できた
 4 授業研究で授業について意見が言いやすい雰囲気ができた
 5 その他
 ※ その他 (中) 協議の柱によっては全く参加できなかった
 (高) 「ワークショップ型」の形式がよくわからなかった

小	中	高
25	56	40
33	75	63
21	25	9
21	32	29
0	6	3

<D 対児童生徒>

- 1 担任以外(教科担当者)も児童生徒への指導がうまくいくようになった
 2 その他
 ※ その他 (小) 児童のよいところや伸びたところを見付け担任以外の教師も賞賛することが増えた
 (高) 指導がうまくいくように考えるようになった

小	中	高
19	25	29
13	0	3

< E 教師同士 >

- 1 児童生徒の指導目標の共有化ができた
- 2 TTの連携が促進した
- 3 児童生徒の学びについて語り合うことができた
- 4 授業づくりや授業改善のことを話題にして語り合う（質問し合う）機会が増えてきた
- 5 教師同士のコミュニケーションが活発になり、協力しようという同僚性が高まった
- 6 授業実践のよい取組の共有化が進んだ
- 7 その他

小	中	高
19	75	37
9	56	14
26	63	40
19	50	43
16	50	26
11	31	11
0	0	0

< F 教師個人 >

- 1 チームで話し合いに取り組む中で新たな知見や実践へのヒントが得られた（専門性の向上）
- 2 授業づくりの力（授業設計力）が高まった
- 3 授業を改善していこうという意欲が高まった
- 4 教材研究日を有効に活用できるようになった
- 5 授業や日々の指導に関する専門性を高めたいと感じるようになった（研修の必要性を感じた）
- 6 その他

小	中	高
32	88	51
15	44	17
32	69	43
6	19	6
15	38	46
0	0	0

上記以外で感じられたことがあれば具体的にお書きください。

< 中学部 >

○ 上記の中でも特に同僚性の高まりや話しやすくなったことを強く感じる。

< 高等部 >

△ 係が考えているようなことは無理があり、実施できませんでした（授業提供はしましたが…。）。

△ 元々、チームで取り組んでいるので、テーマ研のチームという感じではなかった。

- 6 授業実践期間が終わった後でも、授業づくり（PDCAサイクル）が継続して活発に行われるために必要なことはどのようなことだと考えますか。チームでの実践後の成功例や今後も本校で充実した授業づくりを円滑に進めていくための建設的な意見やアイデア等があればお書きください。

< 小学部 >

- ・ 小学部で行っている授業づくり部会の継続（2）
- ・ 係が「これからも継続して取り組む」ことを呼びかける。行っているかどうかを相互のチームや学部間でチェックする。
- ・ 授業づくりについて語り合える時間があればいいと思います。
- ・ 授業を始める前、途中経過、その後を話し合っている。その月の単元を任されると、一人で悩むことが多く負担に感じていたが、授業づくり部会で話し合うことでそれらは解決できる。
- ・ 一人の授業者が同じ内容（日生）で授業を行ったので、PDCAサイクルがしっかりできたと思うが、Dは一人で負担をかけることになるのでよかったとは言えない。自分たちの指導にどう般化していくかという話し合いもできなかったので広がりももてなかった。

< 中学部 >

- ・ P→Dは必要なので行っているが、C→Aはなかなか。意識して行うようにすることが大切。
- ・ 小学部のように授業作りの日を設定して話し合いの場をつくる。
- ・ 生徒が帰ってから子どものことを語る時間がほしい。会議等の日程・時間の適正運営。
- ・ 研修の機会（外部講師の招聘）

<高等部>

- ・ 会のない放課後を増やし、話し合いをする時間の確保。(2)
- ・ 多忙さの解消。ゆとりがなければ豊かな発想は生まれにくいのでは。
- ・ 授業参観（なかなか難しかった。参加しやすい体制づくり）や授業づくりのための時間の確保。
- ・ ミーティングの時間を設定して定例とする。
- ・ 1人1研究授業（略案での参観授業）。
- ・ 定期的に授業を参観し、意見交換する場が必要。
- ・ 日頃の指導集団が小集団であるとよい。
- ・ チームが公開する日を決める。
- ・ チームで話し合い活動を増やすこと。
- ・ 日頃の授業づくりも、できる限りチームで話し合いながら、行っていくことが大切（この研究をイベントとして終わらせない）。
- ・ 実態をより正確にとらえ続けようとする。仮に見立てた子どもの目標を共有すること。指導における仮説をもつこと。様々なアイデアや指導の方法を得ること。
- ・ 普段から質問等が気軽にできる雰囲気づくり。いつでも参観しても大丈夫という教師の意識、授業づくり。

Ⅱ 集中実践期間で授業提供をされた先生方へお聞きします。

質問Ⅱ回答者数 < 小学部：9人 中学部：10人 高等部：20人 >

- 1 まとめて掲載してあるため、省略
- 2 授業提供にあたって、授業づくり（P）の話し合いや打ち合わせは何回行いましたか。
（複数回提供された先生は、おおよその平均で回答してください。）

	小	中	高
A 1回	25	40	40
B 2回	50	30	25
C 3回	0	20	25
D その他	25	10	10

※ その他 (小) 4回 (中) 5～6回 (高) STと5・6回

- 3 授業提供にあたって、授業づくりの「P」の話し合いや打ち合わせは1回あたりどのくらいの時間を設定して行いましたか。（複数回話し合いを行った場合はおおよその平均で回答してください。）

	小	中	高
A 10分	0	0	5
B 20分	0	0	25
C 30分	0	55	20
D 40分	38	18	20
E 50分	62	27	25
F その他	0	0	0

- 4 授業設計の話合いで使用したツールはどんなものですか。あてはまるものに○をつけてください。
(複数回答可)

- A 書式①授業実践略案 (たたき台も含む)
B 個別の教育支援計画
C 個別の指導計画 (重点目標)
D チェックリスト (国・数)
E チェックリスト (生活面)
F 各教科・領域の年間指導計画
G 参考資料や書籍
H その他

小	中	高
43	80	80
0	30	30
22	50	45
7	80	10
7	10	5
14	20	15
7	10	15
0	0	10

※ その他 (高) 参考作品, 担任作成の資料

- 5 チームでの授業設計の話合いにあたって先生方が工夫された点を具体的にお書きください。

<小学部>

- ・ 展開で迷っている部分のを中心に話し合ってもらった。
- ・ VTRを見ながら付箋について話し合った。
- ・ つまづいているところをグループで話し, 他のクラスはどのようにしているのかを聞いて話し合った。

<中学部>

- ・ どのように進めたらベストであるか迷うところを聞いた。
- ・ 生徒のためにどんなアプローチをするか意見を聞くことでアイデアが膨らんだ。
- ・ 指導案をある程度作ってから始めた。
- ・ あらかじめ話し合いで聞きたいことを絞っておく。
- ・ 担任をしていない生徒の日頃の様子を教えてもらい, 課題解決のヒントとしました。
- ・ 教育支援計画・指導計画をもとに目標を設定した。

<高等部>

- ・ 場をもつこと自体が素晴らしいと思います。
- ・ 見通しの持たせ方, 終わりと始まりを明確にすることを中心に話し合った。
- ・ 生徒の実態の共通理解と実態に応じた目標設定, 支援の方法。
- ・ 支援が必要な生徒にどう働きかけるかを中心に授業を組み立てることで, 全体が定まってきた感じがある。
- ・ 指導の手立てを中心に検討した。
- ・ 生徒の変容をより見やすくするために, 参観の観点を絞ることを決めた。
- ・ 教材等は, 実際のを準備したり, 他学年の同じ題材の作品を準備したりした。
- ・ 教材・教具の作成, 板書計画の検討などを話し合うことができた。

- 6 授業提供後の授業検討会 (C) は, どのくらいの時間を設定して行いましたか。(複数回話し合いを行った場合はおよその平均で回答してください。)

- A 10分
B 20分
C 30分
D 40分
E 50分
F その他

小	中	高
0	0	5
13	0	20
0	46	10
13	27	15
74	27	30
0	0	5

※ その他 (高) 参加できていない

7 まとめに掲載してあるため、省略

Ⅲ 普段の授業づくり（集中実践期間以外）の現状についてお聞きします。

1 日々の授業づくりの中で課題として感じられていること、または不十分だと感じられていることを次の項目の中で、あてはまるものの□にチェック✓をつけてください。（複数回答可）

	小	中	高
A 個別の指導計画（重点目標）と授業の関連	63	44	60
B 個別の教育支援計画と授業の関連	38	25	40
C 目標設定や目標の共有化	31	28	43
D 指導内容の設定	44	13	17
E 指導過程の構築	13	19	26
F 導入の工夫	25	19	20
G 児童生徒の評価	25	25	29
H 指導の評価（教師の評価）	13	44	34
I TTの打ち合わせや連携に関すること	31	31	34
J チェックリストの活用	81	31	57
K 指導の順序性や段階性に関すること	44	31	20
L 生徒の活動量の設定	25	19	14
M 実態差への対応	38	50	51
N 授業づくりの時間確保	44	63	40
O 教材・教具の作成	44	38	34
P 教材の共有化	44	44	29
Q 自立活動の指導との関連	25	31	40
R その他	0	6	0

※ その他 （中） 教育課程とのつながり

2 先生方が普段の授業づくりについてペア担任以外のメンバーで複数集まって授業づくりの話し合いや準備をしている取組があったら教えてください。

（どの教科領域・どんな指導形態・いつ・どのくらいの頻度で・どんなメンバーで・どんな内容を）

<小学部>

- ・ 学部のない火曜日に合同授業（音楽、体育、生単、遊びの指導）のチーフと部員が集まり、授業づくり部会を行っている。（10）

<中学部>

- ・ 前月や月初め、題材が始まる前に担当で授業作りの検討をする。（各教科や作業学習）（2）
- ・ 美術で新題材に入る前。月・水いずれかの15：40～実施。目標や製作方法、支援方法の確認等
- ・ TTでの授業においてCTが中心に事前に指導案を作成し指導のコツや目標設定の観点の確認
- ・ I課程の教科の打ち合わせ（中・高で）
- ・ かがやき（総合的な学習）…朝の打ち合わせの後や休憩時間に集まり打ち合わせを行う。
- ・ 自立活動…時間の前に担任との打ち合わせ。授業後は、授業に関して話し合い次時の指導内容に生かす。

<高等部>

- ・ 保体、美術、専門教科の先生+教科担 空き時間の利用。
- ・ 授業提供したものでは検討会ができず、他の授業で授業研究をしたため。
- ・ 空き時間があれば、チームで打ち合わせ（授業や評価）を行っている。
- ・ 新しい単元前には必ずどんな方向性でいくかを話し合っている。
- ・ 行事等の前にどんな内容を行うかの確認。

3 先生方が普段の授業づくりについて話し合いや準備をする時間帯はいつですか？あてはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

- A 水曜日の教材研究の日
 B （職員作業等のない）金曜日の教材研究の日
 C 会のない日の放課後
 D バス発車後～16時の間
 E 16：50以降
 F その他

小	中	高
19	38	20
10	38	6
32	88	63
10	50	23
13	44	63
16	13	26

※ その他 （小） 空いた時間、学部のない火曜日、授業づくり部会 （中） 土・日
 （高） 空き時間、朝の8：20までの時間、紙面、テーマ研の日

4 普段の授業づくりではどんなことを話題にしていますか。具体的に教えてください。

<小学部>

- ・ 子ども一人一人の目標の共有（4）
- ・ 子どもの実態と与える課題の適合性（4）
- ・ 授業内容や流れについての検討（3）
- ・ 活動内容（3）
- ・ 目標達成のための手立て、教材教具（2）
- ・ 子どもの授業での様子
- ・ こんな授業でよいか。この前の授業で良かったか。その後の評価を話し合っている。

<中学部>

- ・ 指導内容・授業の流れについて（3）
- ・ 目標について（3）
- ・ 個に応じた支援（活動・活動量が実態に合っているか）（3）
- ・ 個の活動範囲や生徒の反応からどのように一人一人の計画を立てていくか（2）
- ・ だれがどんな活動ができるか、そのためには何を準備（教材・教具）すればよいか（2）
- ・ 「こんなことができた。」「これはちょっと難しかった」等。その日の授業での様子を茶飲み話的にしています。気軽に気楽に授業に役立つ情報交換ができるのが有り難いです。
- ・ 次のことを踏まえた上での授業づくり（授業のつながり）
- ・ 教材・教具について

<高等部>

- ・ 生徒の実態や教材がその生徒に合うかどうか、実態差に応じた授業（7）
- ・ 授業内容について。授業の進め方や流れの確認。（4）
- ・ 何を目標とするのかを一人ひとりについて話し合う。
- ・ 指導内容、手立て、場の設定など。
- ・ 楽しく活動でき、学びがしっかりと定着するにはどうしたらよいか。
- ・ 教材・教具づくり、板書計画、生徒の実態や変容について。
- ・ 教師の動きと担当生徒の確認。
- ・ 授業の準備について。
- ・ まず学習計画について実態を合わせて大まかに（ここが一番長い。目標を決めるので。）。次に使用する教科やワークシートを打ち合わせ、最後に授業の流れ。
- ・ なぜその目標か？なぜその活動か？なぜその手立てか？個の評価（個人目標の達成状況）は十分か？といったことを常に意識化し、指導仮説をもつこと。授業において検証することが授業実践では不可欠である。
- ・ 生徒の課題改善の方法、授業作り、生徒の変容と段階化、各教師の動き、内容の確認。実際の授業の適正化における反省→次回に向けての取り組み。